
白い月

佐久間 迅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い月

【Nコード】

N6674V

【作者名】

佐久間 迅

【あらすじ】

主人公、北上・綾希きたがみ・あやきのもとにある日死に神を名乗る少女が現れる。彼女の目的は綾希に死を告げることだった…

Prologue

朝が来て夜が来る。私は生きている。それが当たり前のはずだった。今日までは……

七月十一日、二十四時三分。北上・綾希きたがみ・あやきは見えていたトーク番組が終わったところでテレビの電源をプツンと消した。そして自室へいきベッドに潜り込む。遅い時間帯ということもあってか、綾希はすぐに寝付いた。夏にしては涼しく、少し風の強い日だった。

一時間経った頃、綾希は眼を覚ました。時計に眼をやると二時を過ぎている。窓は開けっ放しでカーテンが風で揺れていた。風の音で眼が覚めたのか、と窓を閉めようと手を伸ばした。

「お目覚めですか？」

高く透き通った声でした。驚いて声がする方を向くと一人の少女が立っていた。細く長い漆黒の髪、透けるような白い肌、海を映し出した様な蒼い瞳……俗に言う美少女というものだった。その少女は黒い礼服の様なワンピースを身に纏いこちらを見ていた。

死に神の宣告

「こんばんは。」

その少女は静かに微笑んで綾希に歩み寄って来た。そして窓から空を見上げた。

「月が綺麗ですね。」

一言一言が鈴の音のように聞こえる。綾希はそこで我に返った。

「ところであんた誰。」

ベッドから起き上がって尋ねる。少し低い声で言ってみただが、少女は動揺することもなく淡々としていた。

「あなたが聞いているのは名前ですか？それとも何者かってこと？天然なのかわざと揚げ足を取る様な真似をしているのか定かではないが、綾希は少しいらついた。

「悪いけど、両方教えてくれる？」

綾希の気持ちに気づいてか少女は少し驚いたように一瞬目を見開いたがすぐにまた元の笑顔に戻っていた。そしてそっと口を開いた。

「名前はありません。そして私は死に神です。」

さつきと変わらない笑顔だった。綾希はぞくりと背筋が凍りつくような感覚を覚えた。

「は？何言って、」

「嘘、じゃないですよ？綾希さん。」

言葉を遮られ固まってしまう。先ほどは綺麗だと思った瞳が今は気味が悪くて仕方ない。綾希はとっさに目を逸らした。そして綾希の中に一つの疑問が浮かんだ。この少女はなぜ自分の名前を知っているのか、と。少女はまた空を眺めている。そこで少女はどこからか一枚の紙を取り出した。そして時計を見てつぶやいた。

「予定時刻は二時二十八分。残り丁度十分。」

紙を見ながら少女は続ける。

「被死者、北上・綾希。高校二年生。年齢は……」

「いい加減にして！」

綾希は声を荒げて怒鳴った。自分でも驚いた程で家族が起きてしまったんじゃないだろうかと少し後悔した。だが少女はピクリとも動かず視線を綾希に移しただけだった。そのとき綾希の苛立ちは最高潮に達した。

「どこで私のこと知ったのかわからないけど、これは不法侵入！立派の犯罪だよ！それで死に神とかふざけないで。ごっこ遊びは自分の家でやってくれる！？」

少女は目を見開いた。

「何か言ったら。」

綾希は少し乱れた呼吸を整えながら少女を睨みつけた。しかし少女は何も答えることはなく再び窓の方へ目をやった。

「聞いているの！？」

綾希は思わずカツとなり少女の手を掴んだ。その瞬間言葉を失った。少女の手が驚く程冷たかったのだ。冷え症どころではなく生きている人間の手を掴んでいる気がしなかった。そんな綾希の表情を見た少女はにこりと微笑んだ。そして少女は自分からもう片方の手を綾希の手に添えた。

「冷たい、でしょう？」

綾希は何も言えなかった。

「もう一度言います。私は死に神。そして使命があるからあなたのもとへやって来た。」

そう言うと少女は綾希に近寄ってきた。

「そしてあなたは人間であり被死者。つまり」

少女は綾希の真正面に立ち、こう告げた。

「あなたは、まもなく死ぬ。」

そのとき少女は初めて冷たい表情を見せた。

「残念です。」

少女はポツリと呟いた。その瞬間、綾希は床にしゃがみ込んだ。急に息が苦しくなり、胸を押さえる。家族を呼ぼうにも苦しくて声が

出ない。何が起こったのか、綾希には全く分からなかった。「まもなく死ぬ」先ほどの少女の言葉が脳裏をよぎる。本当に彼女は死に神だった。そして死に神は自分に死をもたらしに来たのだ。綾希はさらに息苦しくなるのを感じた。

- 私は死ぬ -

そう思った瞬間、急に綾希は怖くなった。死にたくない、そう思っても息はどんどん苦しくなる。助けて、誰か起きて、気づいて……！綾希は力を振り絞り床を叩いた。少女、いや死に神はそんな綾希を表情を何一つ変えず見ていた。

「もう少しゆっくりお話がかかった。でも、もう時間のようにですね。さようなら、北上・綾希さん。」

そう死に神が言った直後、急に呼吸が楽になる。目の前がだんだんとぼやけていく。意識も遠が遠のくのがわかる。最期に視界に映ったのはこちらを見下ろす死に神の姿だった。

「北上・綾希。七月十二日、午前二時二十八分。死亡を確認。」
死に神がそう言うと持っていた紙がスツと消えた。

「さようなら。」

死に神はもう一度言った。

多分、彼女は死んだ。

突然の帰還

無の世界。ひたすら真つ白な世界。何も無い、聞こえない。自分の存在すら思い出せない。そんな世界に綾希は一人立っていた。その世界に突然音が生まれた。しかしよく聞こえない。

「アヤ、キ……」

<アヤキ>とは誰かの名前だろうか。

「アヤキ、さん」

いきなり何かに肩を掴まれた。痛みは、ない。そしてぼんやりとしか聞こえなかった声がだんだんとはっきりしたものに変わっていく。
「綾希さん。」

今度ははつきりと聞き取ることができた。それと同時に周りの景色が一変した。ベッドに開いていた窓、そして死に神と名乗る少女……。一度にたくさんのことを思い出し綾希は頭が痛くなった。

「綾希さん。」

死に神はもう一度綾希の名を呼ぶ。あの意識を失う前の苦しみを思い出し怒鳴りつけてやりたくなった。しかし綾希の口から出て来た言葉は全く別のことだった。

「あの何もない世界……あれが死んだ後の世界なんだね。」

死に神は少し考えるそぶりを見せたあと、

「そんなことありませんよ?」

と答えた。死に神が嘘をついているようには見えなかったが綾希は信じられなかった。

……だってあの世界は何も無かった。何も感じず何も聞こえず……
そこで綾希は一番重要なことに気付いた。

「どうして私は今ここにいるの?死ぬはずじゃあなかったの?」

矛盾

「死んでいないからです。」

先ほどの問いに対し死に神は真顔でそう答えた。そんなわけないと綾希が言い返す前にまた死に神は続けた。

「私も死んだと思いました。だから、さようならと言った。そのあとはもう帰ろうと思っていたんですよ。でも違った。死んでいなかった。戻ってきた、と言った方が正確かもしれませんね。」

意味がわからない。「死ぬ」と運命を告げられ実際苦しみも味わった。だが死んでいなかったと死に神は言う。死に神は机の向かいの椅子に座って話し始めた。

「見て下さい。」

死に神は折りたたまれていた紙を綾希に差し出した。その紙はさっき消えたはずの紙だった。綾希はそつと広げて中を見る。

『北上・綾希 十七歳 七月十二日 死亡 済』

死亡の後に「済」とハンコが押されている。死亡済みか確認済み、というところだろう。

「この紙を見る限り私は死んでるんじゃないの？ハンコ押してあるし。」

綾希はハンコの部分を指差した。

「そこなんです。綾希さんの言う通り。私にもわからないんです。なぜあなたが今ここに存在しているのか……」

死に神は本当にわからないようだった。相変わらず無表情だったが、一体何が起こっているのか。二人は初めて同じ感情を共有した。

二人の疑問

再び静かになった室内。先に沈黙を破ったのは綾希だった。

「あのさ、ところで人の生き死について死に神：あんたが決めるの？」
考える事に飽きた綾希は質問を変えた。とりあえず聞いてみたい事はたくさんあるのだ。

「いいえ、違います。」

綾希はふうんと言ってベッドに腰掛けた。もし、「はい、そうです」なんて答えたら平手打ちの一つでもしてやろうと思っただけに拍子抜けしてしまった。同時に肩の力も抜けていった。

「じゃあさ、誰かから聞いたりするわけ？」

綾希は漫画の設定のような“天界の長”とか“全知全能の神”なんて答えを想像していた。死後の世界は信じていない方だったのだが。「誰かから聞いた訳ではありませんよ。そんな存在、聞いた事もありませんし。」

予想外の答えだった。

「じゃ、じゃあ同業者：ほかにも死に神はいるの？」

「いるにはいますが……。話すことも特にありませんし、こんな例外も聞いたことはないです。」

おかしい。どうして死に神本人にもわからないようなことが起きているのだろうか。

「-ねえ。」

綾希は少し低めの声で呼び掛ける。

「はい？」

死に神が答える。

「じゃあどうやって知るの？人が死ぬのを。」

「そのときになればわかるんです。この紙はいつの間にかポケットに入ってます。」

死に神の視線が窓に向いた。外はまだ暗い。

「何かをして知るんじゃないんです。いきなりわかるんです。私も理由は説明できないし、わかりません。」

死に神はふうとため息をついた。一気に話して疲れたのだろうか。

「あなたは死ぬの、死なないの？」

「わかりません。」

「どうやって死に神になったの？」

「わかりません。」

「……………」

立て続けに質問をした結果、得られた情報。それは「この死に神はなにも知らない」ということだけだった。綾希はふつつと沸いて来る苛立ちをまぎらわそうと深く息を吐いた。

停滞

綾希はイライラしていた。理由は二つ。さっきから何を聞いても抽象的な答えか「わからない」しか返って来ないことと、死に神の態度である。なんとかこの事態を理解しようとする綾希に対して死に神は質問には答えるがそれ以外は何か考えるそぶりもなく、ぼーっと窓を眺めている。綾希はまた別の質問を考えたが何を聞いても結果は同じような気がしてどうしたものかと頭を悩ませていた。

「…一つだけ、」

死に神が突然話し出し、綾希は少し驚かされた。

「一つだけ、覚えています。初めて目が覚めたのは、公園だった。

月の綺麗な晩でした。」

死に神はその時のことを懐かしむように目を細めた。

「へえ…そうなんだ。この際だから知ってる事全部教えてくれない？死に神とか死について。」

綾希はベッドに深く座り直し足を組んだ。始めからこう聞けばよかったのだ。少し後悔の念がよぎった。しかし死に神は首を横に振った。

「残念ながら死について私ができるのはさっき言ったことぐらいです。しかも誰かが死ぬ時も予定時間の少し前になって初めてわかるものなんですよ。」

「ああ、そうですか…」

また振り出しに戻った、と綾は落胆しベッドにドサリと寝転がる。だんだんやる気がなくなってきた。それも無理はない。少し前までは普通の日常があったのに。ここ数時間で事態は豹変した。死に神が現れ自分は一度死に、何故か生き返り死に神も理由がわからないという。おまけに何を聞いても知らぬ存ぜぬだ。誰かに話したら一体、何人の人が信じてくれるだろうか。多分信じてくれるのはオカルト好きなマニアくらいだろう。綾希本人でさえ未だに実感がわい

てこないのだ。綾希は質問も尽き黙り込んだ。死に神も黙っている。二人が何も話さなくなつて数分が過ぎたがどちらとも口を開く様子はない。

外は朝日が昇りかけていた。

変化？

沈黙に耐え切れなくなったのは綾希の方だった。

「あのさあ、私これからどーすりやいいわけ？もうこれで何もなければ寝るけど。」

枕の位置を整えて寝る態勢に入る。そして寝転がるうとした時だった。

「待って下さい。」

死に神が綾希の手を掴んだ。相変わらず冷たい手だった。綾希は気味が悪くなりその手を振り払った。

「ちよっ…離してよ。で、何なの？まだ何かあんの？」

外はうつすらと明るい。明日、というか今日も学校があるのだ。数時間しか寝ていないし、死んだりもして疲労はピークに達していた。今思えば死について聞く必要など全くなかった。自分は今生きているのだから。それなのにまだ寝せまいとする死に神に綾希はまたいらついていた。いちいち人をいらつかせる死に神だと綾希は思った。綾希は死に神を睨みつける。どうせまたお決まりの無表情を貫き通すだろうと思っていた。しかし死に神を見るとそうではなかった。

困ったような、迷っているような、そんな表情をしていた。ここへきて初めて見せた表情で綾希はなんだか悪い事をした気分になった。「あ…あの、死に神？」

名前を呼ぶとハツと我に返ったようにまたいつもの無表情に戻った。

「あ…すみません。」

そしてまた困った表情に戻る。なんだか落ち着きがない様子だった。「あの…えっと」

綾希と外を交互に見てもぞもぞと喋りだす。さっきまでとは大した違いだ。綾希はこういった事に苛立ちを覚える性格の人間だった。始めの方はなんとか堪えていた。自分だって疲れているし怒りたくなんてない。綾希は怒りをなんとか抑えつつ、死に神が話し出すの

を待った。

変化？

しばらく堪えていた綾希だったがそれにもとうとう限界が来た。

「何なの！？早く言つてよっ！私、明日学校あるのに……！」

綾希は思い切り怒鳴った。家族を起こしてしまいかもしれないし窓も開いている。だがそんなことを考えられない程に限界だった。全部終わらせて、夢だった事にして眠ってしまいたかった。

「で？早く言つてよ。言わないなら帰つて。今、すぐに。」

綾希は苛立ちを隠さずに外を指さして言った。何も言わなくていいから一秒でも早く帰つてほしかった。死に神は微かに俯いたが、その後真つ直ぐに綾希を見た。どうやら決意を固めたようだ。そしてやっと言葉を発した。

「今わかつたんです。」

綾希を指さして死に神が言った。

「え、私？何がわかつたの？もしかして生き返つた理由とか」

「いいえ。」

死に神は綾希が言い終わる前に首を横に振った。

「じゃあ一体何が……」

「死期が、です。」

綾希は一瞬ゾクリとした。鼓動がだんだん早くなつていくのがわかる。本能がその質問はするな、と告げていた。しかし綾希は聞いてしまった。

「私、の……！？」

綾希はただ返事を待つ。恐怖で手が震えた。死の恐さは身を以て体験した綾希にとってはなおさらだ。外で強い風の音がした。死に神は口を開いた。それすらスローモーションに見えた。

「はい、そうです。」

ここ一番の強い風が吹き、カーテンが勢いよく広がる。

「……………」

綾希は何も言えなかった。どうして、どうして。

足がふらつき綾希は床に座り込んだ。力が全く入らない。

「綾希さん、大丈夫ですか？」

差し出された手に気付かないフリをし綾希は下を向いたまま、それでもなんとか言葉をつむぐ。

「死期……」

「え？」

「死期っていつなの？」

冷や汗が止まらず気分が悪い。そんな綾希を見ながら死に神は静かに言った。

「ちょうど明日のこの時間……つまり二十四時間後です。」
それはどうしようもなく残酷で非情な宣告だった。

悪足掻き

丁度、二十四時間後 - - :

綾希の頭の中に死に神の言葉が何度も巡った。ふと手が震えているのに気が付いて、もう片方の手で咄嗟に押さえた。その時綾希はあはることに気が付いた。そして綾希はそつと立ち上がるとあるだけの金をかき集めだし、財布に入れた。リビングに下りて保険証も取りに行き財布や定期等と一緒にカバンに雑に詰め込んだ。夜に充電しておいたケータイも滑り込ませる。そのあと急いでたんすからてきとうに服を取り出して着替え始めた。死に神はそんな慌ただしく動く綾希をただじっと見ている。綾希は死に神のことなど気にもかけずバタバタと仕度をし、机の上に「用事ができたので、出かけます。」とだけ書いたメモを置いて家を出ようとした。玄関のドアを開けようとした時だった。

「何をやる気ですか？」

後ろから落ち着いた声があった。綾希はすぐに振り返る。死に神はじつとこちらを見つめていた。

「病院、行くの。」

焦りがあるようだった。そして再びドアに手を伸ばした。

「何も変わらないのですか？」

伸ばしかけた手がピタリと止まった。死に神は続ける。

「あなたが死ぬことは既に決定事項です。それに綾希さん、あなた現時点ではいたって健康体、悪いところなんてありませんよ。」

だから病院に行ったところでなにも変わりません。そこまでは言わなかったが綾希は死に神の言いたい事が容易に想像できた。嘘ではないことも何となくがわかった。まるで死に神に全てを見透かされている、そんな気がした。だがどうしても死にたくない。諦めきれなかった。綾希は死に神の横を通り過ぎ、ドアの外へ出た。一面の朝焼けが綾希の目に飛び込んできた。鍵を掛けてから時計を確認

する。もう後戻りはできない……
綾希は少しの希望にすがるように歩き出した。

予定変更

目の前はもう明るい。リミットは丁度明日のこの時間。

- 急がなきゃ -

綾希は小走りで駅へ向かう。確か一駅程行った所に総合病院があったはずだ。

「綾希さんっ」

初めて聞く死に神の焦ったような声に思わず足を止める。振り向くと死に神が後ろに立っていた。綾希は少し息が上がっていたのに死に神は涼しそうな顔をしていた。

「なに、さ…?」

まだ息が整わない。死に神の視線はどこか宙を舞っている。

「……………し」

死に神がボソリと何かを呟いたが綾希は聞き取ることができなかった。

「え、今なんて?」

「運試し…」

「運試し?」

何の話だろうと綾希が考えていると死に神は綾希に手を差し出してきた。

「……………?」

綾希はどうしていかかわからずに差し出された手をじっと見た。

「…手。」

「え?」

「私の手、握って下さい。」

「……………え?」

いきなりなことと頭がついていけなかった。ついでにその冷たい手を握るのも死を連想してしまうから綾希は嫌だった。綾希が嫌そうな顔をして手を握るのを渋っているのを見た死に神はため息をつい

た。

「…早く。時間は迫ってきてますよ?」

綾希は一瞬、たじろいだ。もじもじしている場合ではなさそうだ。仕方なく死に神の手を握る。

「で!?!これってどうなんの?どーすんの?」

「瞬間移動します。」

「は!?!?」

「嘘じゃないですよ。」

「…はい。」

何言っただ、と言おうとしたところをピシヤリと遮られ思わず敬語になった。そして死に神の手を握ってから少し経っていた。

「早くしようよ。」

「あ、はい。では少しばかり目をつぶっていて下さい。」

そう言われて綾希はギュツと目をつむった。瞬間移動とは一体どんな感覚なのか。ふんわりと浮く感覚なのだろうか、それとも…そんなことを考えながら瞬間移動を待った。

「はい、目を開けて下さい。」

「え…?」

まだ、何かあるのかと迷惑そうに目を開けると部屋の中だった。綾希は本当に瞬間なんだなあ…と感心しながら部屋を見回す。

「さて。」

死に神はそう言ってさきほどと同じくイスに腰掛けた。気に入っているのだろうか。

「さっき言った運試しについてですが…」

綾希は姿勢を正した死に神に少し緊張を覚えながらその話の続きを待った。

死に神の話

「さっき言った運試しについてですが…」

死に神は服のポケットから懐中時計を取り出した。素材はおそらく銀で月と鎖の細工がされてある。

「どうぞ。」

死に神はそれを綾希に差し出した。綾希はとりあえず受け取り時計をあちこち眺めたり触ったりしてみた。そういえば、今何時なのだろうと蓋をあけ時間を見ようとした。

「数字が…」

綾希は一度自分の目をこすってみた。だが依然として文字盤に数字ははないままだ。しかし長針と短針だけは存在しお互いどこかを指し示していた。時計を食い入るように見つめる綾希に死に神はクスリと笑い、

「死に神に与えられた一つの特権です。」

とその時計を指差して言った。

「とっ、けん？」

「運試しの説明から始めましょうか。まず運命って信じます？」

死に神はいきなり心理テストのような質問をしてきた。答えは決まっている。

「信じてない。」

綾希はそういった類の話は全く興味のない人間だった。小さい頃は可愛いげのない子供だと周りからはよく言われていた。

「聞くだけ無駄でしたな。まあ、いいでしょう。ですが運命というものには存在します。全てのことは運命に沿って起きているのです。」

「…はあ、なるほど。」

半分くらいは聞き流していた。それに今さら運命がどうだとかを聞いて何になるのだろうか。ひょっとしてこの死に神はどうせ死ぬ運命だとか言ってくる気ではないだろうか。おちよくりも大概にして

ほしいものだ。

「そこで一つ問題です。晴れるはずだった日に人間が人工的に雨を降らせたとしたらどうなるか、わかりますか？」

心理テストの次はクイズか。目の前の死に神が何を考えているのか綾希には全く理解ができない。

「どうって…晴れて終わりでしょう？ほかに一体何が起きるってのさ。」

「答えはく運命がずれてしまう>です。」

綾希は聞き返すのも面倒臭くなってきた。お構い無しに死に神は続きを話す。

「仮に今日晴れるはずだったとしましょう。そこで人が機会でも使つて無理矢理雨を降らせたとしますね。すると晴れるという運命は次の日に延期されます。そして次の日の運命はそのまた次の日にさらに…という風に運命が一つずれることにいるんなことが大きく変わるようになります。もちろん天気以外にも同じことが言えます。」

綾希はあまり理解できず何も言うことができなかった。

「ここまで、わかりましたか？」

「あつ…うん。まあ大体は。」

騙しているようで罪悪感がわずかに襲った。ところでこの話は一体あとどれくらい続くのだろうか。綾希はあの時死に神のことなど無視して病院に向かえばよかったと内心ひどく後悔していた。

時計

「さて、ここからが本題です。」

その言葉でかなり緩んでいた緊張が再び張り詰めた。

「運命というものは複雑に絡み合ったものです。一見何の繋がりもない出来事どうしても実は関係していたりするものです。」

「な、なるほど…」

綾希はそろそろ容量が切れそうだ。

「そこで、」

死に神は一つ咳ばらいをした。

「何か一つ運命を変えることができれば、あなたの死の運命は取り消される、かもしれませぬ。」

「かも!？」

「あくまで今言ったことは仮説ですから。だから

<運試し>なんです。」

本当に今日はすごい日だ。今、綾希は生きるか死ぬかの運試しに挑もうとしている。

「ところでさ。」

「はい、何でしょう?」

「あんた、死に神なんでしょう?人の寿命延ばすような真似していいわけ?」

こういった場合、罰が下ったりどこかからお叱りが来たりはないんだらうか。

「きつと平気でしょう。同業者はいてもリーダー的存在というのはいませんし。それに何もしないよりは退屈しのぎになりそうですし。」

「自分のためかよ。綾希はそう思ったがそれは心の中に留めておくことにした。」

「で、運命を変えるって具体的に何をするの?」

「まず時計を見てみて下さい。」
再び時計に目をやる。

「綾希さんも気づいた通りこれには数字がない。普通に考えたらおかしい話です。」

死に神にも普通の知識はあるのか、なんて綾希は思っていた。

「でもこれは現在の時刻を表したものではないんです。」

「じゃあ何の時間を表してるの？死ぬまでの時間とか？」

「違います。さっきも言った通り死の時間は自然とわかります。」

話、聞いてませんでしたね、と言われ綾希は返答に困った。しかし死に神はそこまで気にしていないようだった。

「正確には年数や日にちを表しています。」

カレンダーのようなものですね、と死に神は付け加えた。

「ですが年数に終わりは無い、正確に言えばわからない、ですかね。だから数字が無いんです。」

そうだったのか、と綾希は相槌をうった。

「もうお分かりかも知れませんが長い針が年数、短い針が月、秒針は日を表しています。」

「…なんかさつきから時間とか死ぬとかゲームの設定みたい。」

綾希はポソリと呟いた。

「ですがこれはゲームではありませんので時間が来たら綾希さんは死にます。」

心しておいて下さいね、と死に神は言ったがどう心積もりをすればいいのか、と綾希は思っていた。

「そしてこの時計の針は動かせるようになっていきます。」

「へえー。」

綾希は感心したような声を上げ時計の針を動かしてみようとした。

「あ、まだ動かさないで！」

しかし死に神が慌てて止めた。

「説明は最後まで聞いて下さい。」

綾希は時計を取り上げられた。その表情は少し不満そうだった。

「運命を変える方法ですが、」

死に神は時計を綾希の目の前にかざした。

「早い話が過去へ行つて運命を変えてきてもらいます。」

相変わらず突拍子もない話だったが綾希もだんだん慣れてきていた。

「今、じゃなくて過去なの？」

「当然です。現時点で運命は決まっていますからそれ以前でないという意味がありません。」

本当に話を聞いてませんね、と言われ綾希はなんだか恥ずかしくなつた。

「そこでこの時計を使うんです。この時計は針を戻すと戻した分だけ過去へ戻れます。」

そんなにすごい物だったのか、と綾希は内心かなり驚いた。

「説明はこのくらいでいいですかね。ではそろそろ始めましょう。」

そんなに余裕ありませんし。」

その言葉で綾希に緊張が走った。鼓動がどんどん早くなつていく。そんな綾希に死に神は一言、棒読みでこう言った。

「では、ご武運を。」

失敗と成功

「武運を。」

そう言つて死に神は時計の針を動かそうとした。

「ちよつと待った!」

あまりにいきなりなので思わず止めてしまった。

「何か?」

表情に全く変化が見られない。きっとこちらの気持ちなど知らうとも思わないのだろう。

「大雑把すぎない? 過去を変えるって…」

「そのままの意味です。何でもいいんです。自分自身でできることをやれば。」

死に神はマニュアルを読み上げるかのように淡々と言った。

「失敗したらどうなるのか…とか。」

綾希はさらに質問を続ける。

「失敗?」

表情はそのままに首をかしげる。

「どういうことでしょうか?」

ほかにどんな意味があるのかと思つたが、死に神は見たことのない物を指差して「これは何ですか?」と聞くのと同じ様な聞き方をしてきた。

「…うまく過去を変えられないとか。」

少しの沈黙が流れた。死に神は呆れたのだろうか。

「綾希さん。」

死に神が口を開く。さっきより心なしが表情が優しくなったような気がした。

「過去を変えることで未来がどのように変わるのかわかりません。」

少し間をおいて続ける。

「失敗も成功も時間が経って初めてわかるものです。仮に失敗があってもめぐりめぐって別の成功を引き起こすことだってあるんです。」
逆もしかりですが、と付け加えていた。

「じゃあ私の死も…」

「何によつて変わるかはわかりません。運試しですから。それに確率は高くはないです。日頃の行いが関わってくるかもしれませんがね。」

死に神はこちらのことなどお構いなしだ。もう少し気の利いたことは言えないのだろうか。

「それでも、」

死に神の長い睫毛が揺れた。

「綾希さんはその可能性にかけようと思ったんでしよう。」

死に神の発する言葉が一つ一つ胸の底にたまっていくようだった。

「時間は過ぎていきますよ。助かりたいのならすることは一つ。それはここで意味の無い問答を繰り返すことではありません。」

綾希は確かにその通りだと思った。どうせ死ぬ運命なのだ。今さら躊躇したところで時間の無駄だ。何かを変えたいなら自分自身が動かなくはいけないのだ。

「わかった。行ってくるよ。」

その言葉には強い決意が込められていた。

「では、これから時計の針を動かします。知り合いの過去に遭遇してしまうといった場合を考えて名前は伏せるか偽名を使用して下さい。それからまず無いとは思いますが…世界のバランスや歴史を大きく変えるようなことは謹んで下さい。」

「ああ、それから」

死に神はもう一個時計を綾希に差し出した。見るとこれは普通の時計だった。

「タイムリミットは明日の四時三十九分です。」

おしと甲へ甲へおしと甲へ

出発

「では、今度こそいつてらっしゃい。」

「あんたは？」

「ここで…待っています。」

死に神は顔を上げた。

「それでは行きますよ。」

死に神はそう言って懐中時計を綾希に持たせ針を反時計回りに動かした。

「あ、数字が無い分どこまで遡るかはアバウトです。あまり昔へ行くと混乱を生むかもしれないので少なめに動かししました。」

どこまで事後報告なんだ、と言いつ返す前に、綾希の視界は歪み始めた。表現のしようがない圧迫かんに表情が強張る。だんだん意識が遠退いていく。死に神が何か言っているように見えたが、聞こえない。最後に見えたものは昇りきっていない太陽と朝方の白い月だった。

主人の消えた部屋に死に神は佇んでいた。

「あなたと私を繋ぐ死という絆はどう変わるのでしょうか。」

死に神が呟いた声は部屋の静けさに吸い込まれていった。あとは時計の秒針の音がただただ聞こえているだけだ。

出発（後書き）

ストーリーの都合上、この話だけやたらに短くなってしまいました。次の話をそのまま繋げようかとも思ったんですが不自然になってしまいました。…

過去

気が付くと道の上に立っていた。綾希は一瞬なぜかと慌てたが、少
し前の出来事を思い出し納得した。

- ここは過去の世界： -

綾希は周りを見渡してみた。道路の真ん中に立っているというのに
車が一台も走っていない。どうやらかなりの田舎にやって来たよう
だ。向こうの方に少し古ぼけた家々や川が見える。

- とりあえずあっちの方に行ってみよう。 -

綾希は人気のありそうな方へ踏み出そうとした。

「あ：。」

そこで自分が靴を履いていなかったことに気付いた。しまった、と
綾希は一人呟いた。このままじゃ靴無しであそこまで歩いていくこ
とになる。決して遠いわけではないがさすがに抵抗がある。それに
靴下を履いているとはいえ夏のアスファルトの道路は熱い。どうし
たものか、と綾希は困りとりあえずすぐ近くの木陰まで行き腰を下
ろした。

「財布もないし…。鞆持って来ればよかった。」

今、綾希は無一文だった。きっと知り合いなんているわけがないだ
ろうし早々に出鼻をくじかれ綾希は少し不安になっていた。一回靴
とか取りに帰れないかな、等と考えているといきなり頭上から声が
した。

「あのう、大丈夫ですか？」

学生服のスカートが目に入った。

「あの、聞こえてます？もしかして熱中症かな…」

誰か呼んでこなきゃ、とその少女が走り出そうとしたとき綾希は我
に帰りスカート慌てて掴んだ。少女は驚きながらも止まった。

「すいません、ボーっとしちゃって…。あの、大丈夫ですから、
そう言つて綾希は顔を上げた。」

「え…!？」

少女と目が合った瞬間、綾希は心臓が止まりそうになった。

「わた、し…?」

それも無理はない。目の前に綾希とそっくりな顔をした人間が立っていたのだから。

少女と靴

綾希は同じ顔の少女を見たまま止まってしまった。少女はというと少し驚いているように見えるがそれよりも綾希のことを心配しているようだった。

「あのー、やっぱり具合良くないんじゃないですか？」

驚きで黙ってしまったっていた綾希は具合が悪いと勘違いしたようだ。少女は心配そうに綾希の顔を覗き込んでいる。

「いや、本当に大丈夫なんです…」

「じゃあどうしてこんなところで座り込んでたの？」

「それは…」

今までのいきさつを話すわけにもいかず返事に困ってしまう。この少女は予想以上にしつこい。しかも途中から口調が変わってきた。

「あーわかったあ。」

少女が得意げな顔をして、綾希を指差してきた。

「家出してきたんでしょう？こころじゃ見ない顔だし。うん、わかるよ。お互いいろいろあるよねえー。」

急にペラペラと喋り出した少女に綾希は戸惑った。そして、『わかる』という言葉に少し腹がたった。こっちは死ぬかもしれないんだよ。綾希は心の中で反論していた。

「てか、何で家出？親とケンカ？」

だから違うって。そう言いたい気持ちを堪えて、「うん、まあ…」と適当に相槌をうった。

「へえー、それは厄介だねえ…。」

少女が綾希の隣に座ってきた。

「ね、うち来ない？」

「へ？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「やっぱり心配だし、少し家で休んでいきなよ。お茶くらい出すし。」

「心配というが家出の詳しい話を聞こうと目が輝いている。」

「ゴメンなさい、私行くところが、」

これ以上話していてもろくなことがないと思い綾希はその場をさるうとした。が、立ち上がったところであることを思い出した。

「忘れてた……」

綾希が頭を抱えているのを不思議そうに見ていた少女も気が付いたようだ。

「靴も履かずに家を出て来たの？」

綾希は恥ずかしくなり俯いた。だから家出じゃない、そう言えたらどんなに楽だろうか。少女はそんな綾希の手を掴んでニコリと笑った。

「ならなおさら家においでよ。靴貸してあげる。ガラスでも踏んだら危険だよ？」

「……………わかった。」

綾希は仕方なく了承した。確かに靴は必要だ。もしかしたら家に行けば顔がそっくりな理由がわかるかもしれない。先祖ということも有り得る。

「じゃ、行こっか。」

「うん。」

綾希はすぐ傍に停めておいた少女の自転車を借りて少女の後を着いていった。

梓

「上がって上がって」

少女の家は割と近くにあつた。綾希は黒ずんだ靴下を脱いで家に入った。時代的にはそこまで昔には飛ばされていないようだ。

「あ、部屋入つてて。二回に上がって右の部屋だから。お菓子とか探してくるし。」

少女は台所の方へ行つた。綾希は一人階段を上がつた。少し古いよ
うで昇るとギシギシと音がなつた。

・この間取り、どこかで見たような・

綾希は妙な懐かしさを覚えた。部屋に入ると木の匂いがした。

「お待たせ。」

少女が盆に二人分の茶と煎餅の袋を載せて入つてきた。二人は適当な場所に座つた。

「あ、そーいえば自己紹介まだしてなかつたね。」

忘れてた、と少女が煎餅の袋を開けながら言つた。

「私、三浦 梓みづうら あずさ！十七歳で高二ね。よろしくー」

名前を聞いて綾希は再び固まつた。母親の名前と全く同じだったのだ。確か旧姓は三浦だつたはずだ。

・もしかしたら・

「誕生日は？」

「七月十二日」

「血液型は？」

「Oだけど。」

「お母さんの名前聞いていいかな？」

「祥子。」

多分、間違いない。綾希は確信した。目の前にいる少女は綾希の母だ。

・ たつた二十年前 -

ずいぶん規模の小さなタイムトラベルだ。

「さつきからいろいろ質問ばっかじゃん。なんでそんなこと聞いてくるのー？」

梓が不思議そうに聞いてきた。さすがにまずかったか、と綾希は後悔した。しかしそれは杞憂に終わったようだ。

「ま、いいけどさ。そっちも名前教えてよ。何て呼んでいいかわかんないし。」

一瞬教えていいのかと悩んだが、ふと死に神に名前は伏せるか偽名を使うように言われたことを思い出した。しかし偽名なんてそんなすぐに思い付かない。

「き…きた…北沢、」

「北沢？」

「えーとあや…じゃなくて…その…」

「北沢 あや（きたざわ あや）？」

「あ、うんそう。私、北沢 あや。」

あまり変わっていないが、まあよしとしよう。

「へえー。よろしくね、あや。」

なんだか信じられない気分だった。今、自分は同い年の母と会話しているのだ。目の前の少女は母ではなく梓という同い年の知り合いという感じがした。しかしこれで顔がそっくりな理由ははっきりした。

「ところで驚かないの？」

綾希は思い切って気になっていたことを聞いてみた。

「何が？」

梓は煎餅をバリバリと食べている。少し食べかすがこぼれていた。

「顔がそっくりじゃん。私ら。」

「ああ。」

そんなこと、と梓はあぐらを掻き出した。

「だって世の中には似た人が三人はいるらしいじゃん？別にそこまで驚かないよ。」

梓はケタケタと笑った。

「私はかなり驚いたんだけど。」
綾希も煎餅を一つつまんだ。

「ああ、だからぼーっとしたりしてたんだ？」

てつきりかなり悪いのになって心配しちゃった、と梓はまた笑い出した。大人になった母の顔が思い浮かぶ。綾希は失敗できない理由が増えたな、と思いながらまた一つ煎餅をつまんだ。

休憩

袋の煎餅がなくなったところで綾希は茶の入った湯呑みを手に取った。その時、

「ちよつと梓ー？」

部屋のドアがガチャリと開いた。突然のことで綾希は驚き湯呑みを落としかけた。

「お母さん？」

その言葉を聞いてドアの方を見る。

「おばあちゃん若い！」

ついまじまじと見てしまう。というかけっこう綺麗だ。会つとよく聞かされる『私が若い頃はかなり美人だったのよ』という言葉はあながち嘘ではなかったようだ。

「あらお友達？」

祥子が綾希に気付いた。が、次の瞬間かなり驚いていた。

「そっくりねえ……」

そうだ、この反応が普通なのだ。

「でしょー？さつき仲良くなったの。」

こっちがおかしいのだ。そしていつ仲良くなったのだろう。

「まあ、そんなことより」

母親も同類のようだ。

「ちよつとお使い行ってきたくない？醤油きらしたのよー。」

祥子の手には既に財布が握られている。

「えー今、のんびりしてるのに。」

「今から夕飯の支度するのよ。ちよつと多めにお金入れとくから、アイスでも買ってきたら？」

「やったあ。ってことで、行くうあや。あ、靴と靴下貸さないかね。」

そう言つて梓は服箆筒を漁り出した。そこで綾希は気付いた。のん

きに人の家で煎餅など食べている場合ではなかった。すっかり梓のペースに乗せられていた。このままだとのんびりと何もせずに期限を迎えてしまう。それだけは絶対にあってはならない。どうにかしてここを出ねばと考えていた綾希のことなど梓は全く気付いていなかった。

「はい靴下。ホラ、暗くなる前に行こ。」

梓が靴下を一足投げてきた。受け取った靴下は時代遅れのダサい靴下だった。

ハズレクジ

綾希は今必死に考えていた。もちろんどのように梓のもとを離れるかについてである。このままずるずるとペースに引き込まれてはいけない。が、なかなかそうはいかないのだ。

「あの、私そろそろ……」

「靴はこれ使つて。私のお下がりだけど。」

うまく切り出せない。とりあえず靴は有り難く履かせてもらった。

靴下に続き靴もなんだかパツとしないデザインだった。これでもこの時代では普通だったのかもしれない。

「さ、行こう。こっから歩いて十五分位だよ。」

「……………」

まあ、いいか。ここで別れたところでどうしていいかもわからない。着いて行つて少しこのあたりの様子を見てみよう。少し言い訳じみたことを考えながら家を出た。

「あっちがよく行く駄菓子屋であれば銭湯。それであれば、ここらじゃ評判の……」

梓はいろいろと指差しうれしそうに話してきた。そういえば母親になつてからの彼女も故郷の話をよくしていた。きつとこのことがすごく好きなのだろう。そんな他愛ない話を聞いている間に店に着いた。

「ここらで一番のスーパーだよ。」

梓はそう言ったが内装も設備も今とは全然違い驚いた。一昔前の映画のセットのようだ。ついでに物価の違いにも軽くショックを受けた。

「そんな珍しい？」

買い物カゴを手に提げて梓が聞いてきた。カゴには既に醤油が入っていた。

「アイス選んで帰ろ。お母さん待ってるし。」

梓が手を引いてきた。なんだか心が暖かいような気がした。

二人は帰り道を買ったアイスを食べながら歩いている。

「あ、ハズレ。」

梓がアイスの棒を少し残念そうに見せてきた。

「あやはー？」

「…ハズレ。」

今食べ終わりハズレと書かれた棒を口から出して見せる。

「あーあ、収穫なしか」

梓は棒をくわえたまま歩いている。

「どれくらいの確率なの？当たりが出るのって」

「わかんない。なかなか出なかつたり簡単に出るときもあるし。」

買ってみたいとわからないよー、と梓は笑っていた。綾希は瞬間的に死に神の言葉を思い出した。

「そういえば綾はなんでこんな田舎の村まで家出して来たの？あちこち珍しそうに見てたし、都会の人なんじゃないの？」

ま、ここも良いとこだけどー、と梓が数歩前を歩く。綾希はというと、うまい嘘が浮かばず困っている。

「ねえ、なんで？」

「えっと…」

好奇心とは時に厄介だと綾希は思った。

「…いつそ本当のことを言ってしまうおうか」

そんな考えがよぎった。

「……梓。」

初めて自分から名前を呼んだ気がする。

「ん？」

「今から言うこと、信じてくれる？」

「ん。」

梓の顔が夕日に照らされている。きつと梓なら信じてくれるだろう。

今、目の前に居るのは母親じゃない。梓という一人の友達だ。彼女ならもしかしたら協力もしてくれるかもしれない。綾希は本当の事を言おうと決心した。

「あのね、梓。実は…」

そう言いかけたとき梓の足が止まった。

「どうしたんだろう…」

梓が見ている方を綾希も見てみると一つの家にたくさんの人が集まっていた。二人はその家に近寄って行った。

父子

「日野さん家だ。」

梓が家を見て言った。

「知り合いなの？」

「知り合いつていうか……。小さい村とかではお互いみんな知ってるもんなんだよ。珍しそうでもないよ。」

へえ、と綾希は適当に相槌を打った。

「日野さんつてどんな人なの？」

梓はうーん、と少し考える。そして家を指差す。

「見てわかる通り、村では多分一番の金持ち。」

確かに人が集まっているその家は村の中では飛び抜けて豪華だった。ほかの家々とは少し離れたところに建っているその家はちよつとした旧家のような。庭には松の木が植えられている。

「あと、」

梓が思い出したように言う。表情が少し曇った。

「あそこ母親居ない。」

父子家庭なんだよー、と言いながら家に向かう。少し声のトーンが低くなっている。

「都会暮らしだったらいいんだけどさ、お母さんが亡くなってこの村に来たみたい。」

そう言っている間に門のところに着いた。

「ああ梓ちゃん。」

中年の女が梓に気付いた。

「浜岡さん。」

梓が近付いていく。綾希はそれについて行った。

「何かあつたんですか？この人だから……」

「実はねえここのご主人、亡くなったみたいなのよあ。」

買い物帰りなのか袋を手に提げていた。割烹着とスリッパに時代を

感じる。

「日野さんが？どうして？」

「事故に遭ったらしくて…。」

それを聞いた梓の顔が険しくなる。

「そんな…。日野さんの子供さんはどうなっちゃうんですか？」

「それが一番、心配よね。親戚の人に連絡がつけばいいけど…」

梓は辛そうな顔をしている。綾希のときといい、梓はお人よしな性格なのだろう。綾希はそんな梓に戸惑ったが何と声をかけていいのかわからない。

「沢野さんの取り計らいで今夜にお通夜があるから家の人にも言っておいてくれる？」

沢野というのは、日野家の一番の近所でよく交流があったらしい。

「わかりました。あや、一旦ウチに戻ろう。」

梓が綾希の手を引いてきた。二人は再び家路を歩き出す。いつの間にか梓の口からはハズレのアイスの棒がなくなっていた。帰り道、梓は気分が相当沈んでいるようで何も喋らなかった。辺りは少し暗くなってきた。

日野家

「お母さん。日野さんのお父さんが亡くなったって。醤油を手渡して梓が言った。」

「日野さんが…?」

祥子も梓と同じように顔をしかめた。

「お通夜が夜にあるってさ。」

「突然ねえ…」

祥子が何か考えるようにしながら夕飯の支度を続ける。

「花屋ってまだ開いてるかしら?」

「多分もう閉まってると思うけど。」

困ったわね、と言って祥子がエプロンで手を拭く。どうやら支度は終わったようだ。

「今からお通夜行ってきましたよ。お花は後日にしましょう。」
祥子がエプロンを外す。着替えてくるわ、と祥子はキッチンを離れた。

「あやも行くよね?」

梓が綾希の方に向き直った。

「え…」

妙なことになった。

「今日は家に帰らないんでしょ?」

そういえば家出という話になっていた。とりあえず着いていくしかなさそう。断ったところで強引に引っ張っていかれるのがオチだろう。

「うん。そのつもり。」

「ウチに泊まっていきなよ。お通夜から帰ったら一緒に夕飯食べよう。」

非常に有り難い言葉ではあったのだが、焦りは増す一方だ。

「行きましよう。」

礼服に着替え終わった祥子が来た。

日野の家には既にたくさんの人が集まっていた。

「三浦さん。」

誰かが祥子に話し掛けてきた。

「隣の家の小橋さん。」

梓がそつと耳打ちしてきた。小橋は帰るところだったようだ。

「今からですか？」

「ええ。さっき聞いたものですから。」

「それで…娘さんはどうでした？」

「それが、本人はあまりよくわかっていないみたいで…。ボーっとしてましたよ。」

「そうですね。」

小橋はでは、と軽く会釈をして帰って行った。

「さ、私達も行こう。」

梓が言う。

「あの、私ここで待ってようかな。」

「え、どうして？」

突然の申し出に梓は驚きを見せた。

「いきなり余所から来た人がいたらみんなビックリするかもしれないし、ホラ私礼服じゃないから…」

もちろんそれも理由のうちだった。だが一番の理由は自分が死ぬかもしれない状況で人の死と直面するのは嫌だったからだ。今も葬式だとかお通夜といった言葉を聞くと気分が悪くなる。人だからもあって頭痛が少しだがしていた。とにかく中に入るのは避けたい。ちなみに梓は制服のままだったので特に浮いてはいなかった。

「うーん…。わかった、じゃあここらへんで待ってて。」

そう言つて梓は祥子と家の中に入って行った。綾希はそれを見届けると人だから少し離れようと家の裏の方に移動した。梓によると三十分ほどかかるらしいのでそれくらいに戻れば問題無いだろう。

綾希は裏門まで来るとその辺りに腰を下ろした。そのとき

・トントン・

誰かが綾希の肩を叩いた。

裏門での対話

誰かが肩を叩く感触がした。綾希は慌てて振り返る。

「こんばんは。」

後ろには四つか五つくらいの小さな女の子が立っていた。女の子は黒いワンピースを着ている。この子が日野の家の子だろうか。女の子はつぶらな瞳で綾希を見つめている。人形のようなかわいらしい女の子だ。だが綾希は何故か一瞬怖くなった。暗くなってきたからなのか、その子が喪服のようなものを着ているからなのか綾希自身にも分からなかった。

「こんばんは。」

考え込む綾希に女の子はもう一度言った。聞こえていないと思ったのかも知れない。

「あ…こんばんは。」

綾希は動揺しながらも答える。ところで目の前の子が日野の子で間違いないのなら、ここにいていいのだろうか。

「ねえ、名前教えてくれる？」

子供は少し苦手な綾希だができるだけ優しい声で言うよう心がけた。

「名前？」

「うん。」

女の子は少し考えてから言った。

「日野桜。ひの・さくら」

やはり日野家の子だ。

「おねーちゃんは？」

「北沢あや。」

「ふうん。」

桜はきたざわ、きたざわと繰り返している。その表情はニコニコと楽しそうだった。

「桜、ちゃん。」

「なーに？」

「ここに居ていいの？」

桜は言った意味が分からなかったようでじつと綾希を見ていた。

「お通夜の途中じゃないの？」

「だんだんとつものつていくイライラを抑えながら聞いていく。」

「お通夜？」

「……………」

一瞬、怒鳴ってしまいそうになった。何もわかっていないこともそうだが、間といい笑顔といい何か気に入らない。しかし相手は子供。綾希はぐつと堪えるしかなかった。

「勝手に外に出て、みんな心配するんじゃないの？」

「うーん……」

通じたのだろうか、分からないのか桜は首をかしげた。

「だってつまらないんだよ。ずーっと家の中でおじさんとかおばさんに挨拶したり。沢野のおばさん、いつも絵本読んでくれるのに今日は泣いてばかりいるの。」

そりゃそうだと言ってやりたくなる。本当にこの子は父の死をわかっていないのだ。

「桜ちゃんいくつ？」

「四つだよー」

これくらいの年なら仕方ないことなのだろうか。自分はとうだったろう。

「お家に来た人がね、みんな桜を見てカワイソウって言うの。泣いてた人もいる。桜、カワイソウなの？」

綾希は何と答えていいか分からなかった。言葉を必死で考えていると急に桜の笑顔がなくなった。

「パパが帰って来ないの。」

「え……？」

お家にいるんな人が来たけどパパが全然帰って来ないの。沢野のおばさんに聞いても何も言ってくれなかったの。」

おそらく泣いて何も言えなかったのだろう。

「それでね、お外でパパ待ってようと思ったの。パパきつとお仕事
が忙しいんだよ。」

パパはかいしゃいん、なの。と桜が言った。

「そいでお外に出たらね、綾希お姉ちゃんがいたの。」

えへへ、と笑って桜が綾希の隣に座る。

「パパまだかなー」

高く幼い声がすっかり暗くなった夜空に響いている。

喪服の少女

誰かが肩を叩く感触がした。綾希は慌てて振り返る。

「こんばんは。」

後ろには四つか五つくらいの小さな女の子が立っていた。女の子は黒いワンピースを着ている。この子が日野の家の子だろうか。女の子はつぶらな瞳で綾希を見つめている。人形のようなかわいらしい女の子だ。だが綾希は何故か一瞬怖くなった。暗くなってきたからなのか、その子が喪服のようなものを着ているからなのか綾希自身にも分からなかった。

「こんばんは。」

考え込む綾希に女の子はもう一度言った。聞こえていないと思ったのかも知れない。

「あ…こんばんは。」

綾希は動揺しながらも答える。ところで目の前の子が日野の子で間違いないのなら、ここにいていいのだろうか。

「ねえ、名前教えてくれる？」

子供は少し苦手な綾希だができるだけ優しい声で言うよう心がけた。

「名前？」

「うん。」

女の子は少し考えてから言った。

「日野桜。」

やはり日野家の子だ。

「おねーちゃんは？」

「北沢あや。」

「ふうん。」

桜はきたざわ、きたざわと繰り返している。その表情はニコニコと楽しそうだった。

「桜、ちゃん。」

「なーに？」

「ここに居ていいの？」

桜は言った意味が分からなかったようでじつと綾希を見ていた。

「お通夜の途中じゃないの？」

「だんだんとつものつていくイライラを抑えながら聞いていく。」

「お通夜？」

「……………」

一瞬、怒鳴ってしまいそうになった。何もわかっていないこともそうだが、間といい笑顔といい何か気に入らない。しかし相手は子供。綾希はぐつと堪えるしかなかった。

「勝手に外に出て、みんな心配するんじゃないの？」

「うーん……」

通じたのだろうか、分からないのか桜は首をかしげた。

「だってつまらないんだよ。ずーっと家の中でおじさんとかおばさんに挨拶したり。沢野のおばさん、いつも絵本読んでくれるのに今日は泣いてばかりいるの。」

そりゃそうだと言ってやりたくなる。本当にこの子は父の死をわかっていないのだ。

「桜ちゃんいくつ？」

「四つだよー」

これくらいの年なら仕方ないことなのだろうか。自分はとうだったろう。

「お家に来た人がね、みんな桜を見てカワイソウって言うの。泣いてた人もいる。桜、カワイソウなの？」

綾希は何と答えていいか分からなかった。言葉を必死で考えていると急に桜の笑顔がなくなった。

「パパが帰って来ないの。」

「え……？」

お家にいるんな人が来たけどパパが全然帰って来ないの。沢野のおばさんに聞いても何も言ってくれなかったの。」

おそらく泣いて何も言えなかったのだろう。

「それでね、お外でパパ待ってようと思ったの。パパきつとお仕事
が忙しいんだよ。」

パパはかいしゃいん、なの。と桜が言った。

「そいでお外に出たらね、綾希お姉ちゃんがいたの。」

えへへ、と笑って桜が綾希の隣に座る。

「パパまだかなー」

高く幼い声がすっかり暗くなった夜空に響いている。

待ち人の月夜

父を待つ桜に綾希は何も言えないまま時間が過ぎていった。この子は父がもう帰ってこないと知ったらどんな反応をするだろうか。涙が涸れるくらいに泣くのだろうか、それとも淡々と受け止めるのだろうか。どちらにせよその時は近い。まあそれを知らせるのは自分の役目ではないが、と綾希は一度伸びをした。

「お姉ちゃん。」

体育座りをしている桜が急に話し掛けてきた。そして空を指差した。

「見て。お月様、綺麗だよ。」

綾希が目を向けるとくつきりとした満月が浮かんでいた。桜もまっすぐに月を見つめていた。綾希はそのとき何か違和感を感じたが、考えないことにした。

「桜ちゃん。」

人の声があった。綾希は驚いて振り返ると初老の女が立っていた。こちらにも喪服を着ている。

「沢野のおばちゃん。」

桜が嬉しそうな顔をした。

「心配したのよ。勝手に外を出て…」

「ゴメンなさい。パパを、待ってたの。」

その言葉で沢野は激しく顔を歪め、シワがさらに深くなった。

「とりあえず、中に戻りましょう。」

沢野が桜の手を引き桜はそれに素直に従う。

「あの、あなたは…？」

沢野が綾希の方を見た。こんなところにいる綾希を不審に思ったのだろうか。

「日野さんのお通夜に来ていたんですが、途中で気分が悪くなってしまっただけです。」

あながち嘘でもないだろう。

「まあ、そう…。」

沢野はあまり納得していないようだった。もしかしたら綾希が桜を連れ出したと思っっているのかもしれない。だが表面上は心配している口ぶりだった。

「桜ちゃんがごめんなさいね。気分の方大丈夫なら一緒に戻ってお焼香だけでもあげていく?」

それはできれば避けたい。だがここで断るのは不自然だ。

「えっと…」

うまい言い訳が何一つ出て来ない。綾希にとってかなり苦しい時間が流れた。

「あや!」

そんな時、梓がやって来た。

「梓?」

「終わって外出たらいなくなっけてビックリしたんだよー。なんでこんなとこいたの?」

最高のタイミングだ。今の梓は綾希には救世主に見えた。

「お友達?」

沢野が梓と綾希をまじまじと見る。

「はい。すみませんがもう帰らないと。」

綾希が軽く頭を下げる。

「そう。気をつけてね。」

「じゃあ桜ちゃん、行きましよう。」

沢野が桜の手を引いて門の中へ歩きだす。桜がうまくよけられた、と安堵している綾希のほうに振り返った。

「お姉ちゃんまたね。」

そしてニコリと笑い手を振ってきた。鈴の音のような声だった。

友達の家

「具合が悪くなった？」

梓が煮物を口に運びながら聞いてくる。現在、夕飯中である。そして綾希はさきほど裏門の辺りにいた理由を聞かれていた。

「昼過ぎのことといい、あやってもしかして体悪いの？」

「いや、そうじゃないんだけど……」

気まずそうに綾希は焼き魚に箸を入れる。ちなみに祥子はというと通夜の手伝いをすると言っけていまして家がた家を出たところだ。

「一緒に居た子って日野さんの子だよね？」

綾希の頭に桜の顔が浮かんだ。

「そうだと思う。」

「落ち込んだ？」

そこで綾希は言葉に詰まった。特に悲しんでいる様子はないが、父の帰りを待つといったときの桜はどことなく寂しそうだった。あれはもしかすると父に起こったことをわかっていたからではないだろうか。

「……桜？」

急に黙り込んだ綾希を梓は不思議そうに見た。

「あ、ゴメン。桜ちゃんは落ち込んでなかったよ。」

梓はそっか、とまた煮物を摘んだ。箸の使い方がやたら上手い。

「まあ、どっちにしる私達には何もできないよね。あのおばさんがうまくやってくれるといいけど。」

綾希は偉そうな言い方だと思ったが、それは桜を想ったのことで悪気はないだろうとわかっていたので何も言わないでおいた。

「ごちそうさま。」

梓が食器を片付けにキッチンへ行った。

「お風呂、先に入っていいよ。」

梓は皿を洗い出した。

「気を使わないでいいよ。泊めてもらうんだし、皿洗いは私がやる。」
「いいって。お客さんにそんなことさせられないよ。」
「そっか。ありがとう。」
綾希は少し申し訳ないと思いつつながら風呂へ向かった。

「布団これでいいかな？ちよつと狭いんだけど…」
現在の時刻は十一時。梓も風呂へ入り就寝の準備に取り掛かっていた。

「十分だよ。」
綾希は受けとった枕を丁度良い位置に置く。

「んじゃ、電気消すよ。」
梓がそう言うのと部屋の中が一気に暗くなった。

「梓、明日は学校？」
「ううん。まだ夏休みだし。」

「でも制服着てたじゃん。」
「部活だよ、部活。」

「何部？」
「バスケ。」
「強いの？」

「一応、レギュラー。」
「チーム自体は？」

「多分、弱小。」
「ダメじゃん。」

暗闇の中、声だけが聞こえる。なんだか友達の家泊まりに来たよ
うな気分だ。綾希は不思議な心地よさを感じていた。数十年経つて
も結局は何も変わっていないのかもしれない。現に、二人は今こう
して同じ目線で話を通じ合っている。

「ねえ、梓。」

綾希は呼び掛けてみたが返事はない。

「梓？」

もう一度呼んだが綾希の声は空を切っただけだった。どうやら寝てしまっただけらしい。梓の顔を覗き込んで完全に寝たと確認すると綾希は布団から起き上がった。そして梓に借りたジャージからもともと着ていた自分の服に着替える。そのままそつと部屋の扉を開けて一階に降りた。この家の鍵はないから玄関から出る訳にもいかない。どうしたものか、と借りた靴を持ってウロウロしていると庭が目に入った。綾希は外に出られる小さな窓を探しそこから庭へ出た。そしてそのまま家の外へ出る。そこで綾希は何かを思い出したように一度家の方を振り返った。そして軽く頭を下げる。

「ありがとう。」

そう呟いて綾希は夜空の下へ駆け出した。

お人よしと想い人

梓の家を出たは良いものの、綾希はどこへ向かえばいいか迷っていた。あのまま梓と一緒に寝てしまえば期限時刻まであつという間だ。それを避けるため綾希はそつと家を抜け出して来た。何か運命を変えないと、そう思うのだが具体的なことが思い浮かばない。夜道の中綾希はうろろと歩き回りながら何をすれば良いのか考えていた。

「あの。」

そんなとき急に誰かに話し掛けられた。時間が時間なので少し警戒ぎみに振り向く。立っていたのは同じ年くらいの少年だった。背は割と高く眼鏡をかけている。

「三浦さん、こんな時間にどうしたの？」

三浦？と綾希は一瞬疑問に思ったが自分は梓と顔がそっくりだったことを思い出す。

「私、梓じゃないんだけど。」

そう言つてやると少年はひどく驚いた顔をしていた。まあ無理もない。

「でも……」

少年は納得できていないようだ。

「梓なら家で寝てるよ。私は泊めてもらつてたの。別に冗談で言つてるわけでも生き別れなわけでもないよ。」

親子なんだから。少年は綾希をじつと見たあと、似ている人っているもんだねえと感心したように笑った。

「で、何でこんな時間に外に出てるの？」

「家出だったんだけど、やっぱり帰ろうかなつて。」

少年はふうんと言つていた。我ながらうまい嘘がつけた。

「あんたは何やってんのさ。」

「僕はお通夜で人手が足りなかつたみたいだから手伝いを。今はコンビニに差し入れ買いに行つたばかりだよ。」

ほら、とお菓子やら飲み物やらが入ったレジ袋を見せてきた。

「そういえば、家はこの近く？」

突然少年が聞いてきた。

「何？いきなり。」

「いや夜中だし、この辺りなら送っていこうかと思って……。」

少年が心配そうに言う。この少年はかなりお人よしな人間のようだ。

「別にいい。」

「でも危険だよ。たしかにここはのどかだけど怪しい奴がいないと
も限らないしさ。」

また厄介な人間に捕まった。雰囲気がどことなく梓と似ている。だ
が今回はそちらのペースに吞まれる訳にはいかない。

「家は遠いし電車で帰るから平気。」

綾希はなんとか嘘を考え出す。

「この時間は走ってないんじゃないかな。」

「じゃあバス。」

「……も走ってないと思うよ。」

「深夜バスとかあるでしょ。」

そうかなあ、と少年はまだ少し渋っている。そこである考えが浮か
んだ。

「あんたって梓の知り合い？」

「う、うん。」

唐突な質問に驚いた後、少年は顔を赤くした。それを見た綾希は試
しに少年に聞いてみた。

「梓のこと好きなの？」

「えっ……！？あの、えっと……。」

予想以上の反応に吹き出しながら綾希は確信した。目の前の少年は
間違いなく梓を好いている。

「まあいいや。頼みたいことがあるんだけど。」

「頼みたいこと？」

まだ少年の顔の赤みは引かない。

「そういえば、名前なんていうの？」

ものついでに綾希は聞いてみた。

「僕は、」

その瞬間、桜と会ったときのような懐かしさを感じた。

「僕は北上 直紀だよ。」

月の失踪

『北上直紀』。その名前が綾希の頭の中でぐるぐると回る。とんでもない人と出会ってしまった。

まさか父親ともこんなところで出くわすとは思わなかった。直紀は梓のことが好き。ということはこれから直紀が猛アタックするのだろうか。それとも梓が一目惚れでもするのか。綾希は二人の姿を思い浮かべ、あれやこれやと考える。

「あの、どうしたの？」

直紀の声で綾希は現実に戻された。

「ああ、ちよつと考え事してた。」

直紀の将来のことを考えていたなんて言えない。

「君は名前なんていうの？名前がわからないと伝言もできないし。」
そっぴえば言うのを忘れていた。

「北沢あや。」

「北沢さんか。わかった。じゃあ、気をつけてね。」

バイバイ、と直紀は優しく笑って綾希を見送る。

「ありがと。あんたも寝不足にならないようにね。」

むず痒い気持ちになった綾希はそれを隠すように顔を少し下に向けて応えた。

「気をつけるよ。」

その言葉の後、二人はお互いに背を向けて歩き出した。

「あ。」

そのとき何かを思い出したように直紀が声を出した。綾希はフイ、と振り返る。

「駅はそつちじゃなくであっちな。バスの停留所もそこにあるから。」

「今度こそバイバイ、と直紀が手を振った。」

「……ありがと。」

綾希はそれを見届けた後、小走りで直紀の言った方へ向かった。父親が理想の人、そう言う人の気持ちが少し理解できた気がした。同時にもし父親じゃなければ、という考えが浮かびその気持ちを掻き消そうと綾希はさらに走る速度を速めた。その顔は少し赤かった。

走り出してから少し経ったところで綾希は立ち止まった。顔は真っ赤になっていたがさきほどの理由とは違う。息は切れ切れになり、足も疲れていた。勢いで走ってはきたものの、この時代に帰る家などは当然なく、息も続かず立ち尽くしていた。ゼーゼーとせわしなく呼吸を繰り返しながらどこへ向かうか必死に考えるが脳も疲れ果て思考を放棄してしまっている。そんなとき、一組の夫婦が目に入った。こんな時間に一体何を、と思ったがよく見ると二人とも黒い服を着ている。きつと通夜の帰りだろう。かなり遅くまでいたところを見ると日野の父親と親しい人だったのかもしれない。

「……よねえ。」
二人の会話が聞こえてきた。綾希は注意しながら聞いてみる。

「日野の子がいなくなってしまうなんて……こんな夜遅くに心配よねえ。」

「たまに父親の帰りが遅いとき、沢野さんと迎えに行っていたそうだからもしかしたら……。」

「でも皆が探しているみたいだけど、見つからないらしいわよ？」
「何があつたかはわからんが、無事だといいな。」

会話の一部始終を聞いた綾希は耳を疑った。少し前に桜の口から父を待っていることを聞いた。有り得ない話ではない。桜の顔を想像すると何故か胸騒ぎがした。特別な感情があるわけではない。だが何かを考える前に綾希の足は動いていた。
行き先は日野の家だ。

再会

小走りで日野の家に向かう。別にさきほどの会話で特別な感情を抱いた訳ではない。だがなぜなのか、「今度こそ」という考えが引つ切りなしに浮かんで来る。以前同じようなことが起きたような感覚だった。桜とは初対面のはずだ。様々な想いを抱えつつ綾希は走った。

「確かにねえ。事故にでも遭ったら…」

途中でさっきの夫婦と同じような黒い服で歩いている女の二人組を見つけた。話題はやはり桜のことだろう。綾希は意を決して話し掛けてみた。

「あの、日野…さんの家ってあつちですか？」

こんな時間に一人というのもあり、二人はかなり怪しむような目で綾希を見てきた。

「今からお通夜に？」

「えっと……桜ちゃんと少し話したことがあって、さっきいなくなつたと聞いて心配になつたんです。」

心配かどうかは怪しいが特に大きな嘘はついていないだろう。

「ふうん、そうなの。」

二人の内の一人である女が綾希をじろじろと見る。まだ怪しまれているのかもしれない。

「失礼だけど、あなたこの辺りの人？見ない顔だけど。」

「あ、ハイ。」

未だに信用されていないようで綾希はその態度に少し腹が立った。するともう一人の女が口を開く。

「まあいいじゃないの。人が死んでしまった時に何かする人なんていないわよ。それに桜ちゃんを探すとしたら、人手も必要になるだろうし。」

こちらは話しがわかるようだ。

「そうかしら。」

かたやもう一人はまだ腑に落ちない様子だ。この二人はなぜ一緒にいるのだろうかと綾希は真面目に考えた。

「日野さんの家はそっちの方。少し行ったら橋があるからそれ渡つたらすぐよ。」

女は指をさして教えてくれた。綾希は「ありがとうございます」と言っただけで走って行った。背後から

「本当に教えちゃって大丈夫なの？」

などと不満そうな声が聞こえた。いつまで言いつもりだ、と綾希は走りながら小さく舌打ちをした。

親切な女の方の言った通りすぐに日野の家が見えた。まだ明かりは点いていて、周りにちらほら人もいる。綾希はそのうちの一人に話し掛けた。

「あの、この家の桜ちゃんって子……」

「北沢さん？」

聞いている途中で誰かに声をかけられ振り返ると直紀だった。綾希は話し掛けた人にすみません、と言って直紀の元に駆け寄った。

「北沢さん、どうしてここにいるの？」

案内間違ってた？と直紀が申し訳なさそうにする。それを見て綾希は本当にこの人間はお人よしだと思った。

「そうじゃなくて……途中で大変な話を聞いたから。」

「大変な話？」

「日野ん家の子がいなくなっただけ。」

「……ああ。」

それか、と直紀が目伏せた。その様子からするとまだ見つからないのだろう。

「もしかして、桜ちゃんを探すために戻ってきてくれたの？」

直紀の顔が少し明るくなる。綾希は咄嗟に目を逸らした。

「……まあ、一回喋ったことあるし気になったから。」

「助かるよ。こんな時間だから人手が足りなくてさ。」

「で、その子が行きそうな所は？」

「そういう場所は桜ちゃんのことをよく知ってる沢野さんが探してる。残りの人達は手分けしていろんなどこ探してるんだよ。」

「どうやら当ては全く無いようだ。どうしたものか、と綾希が頭を悩ませていた時、大きな声が響いた。

「あや!!!」

顔を赤くして走って来るその人物は間違いなく、梓だった。

親子会議

「あや！」

梓が息を切らして綾希の元へ駆け寄ってくる。寝るときに着ていたジャージのままだ。

「三浦さん。」

直紀が顔を赤くした。対称的に綾希の顔は青くなっていった。まさか家を出たことが気付かれるとは。綾希は日野の家まで引き返したことを深く後悔した。二人のいるところまでたどり着いた梓は綾希の肩をガシツと掴んだ。

「目が覚めてトイレ行こうと思ったたらいなくてビックリした。あや、時々様子がおかしかったから嫌な予感がして……。」

少しずつ息を整えながら話す梓に綾希は何も言えなかった。罪悪感さえ感じた。

「どうして急にいなくなったの？」

綾希はえっと、と言ったところで言葉につまった。

「桜ちゃんが心配だったみたいだよ。」

言葉を発したのは直紀だった。

「日野さんの……？」

「う、うん。今ちようどこうして話してたんだ。」

困る綾希を見て直紀は助け舟を出してくれた。

「そっか。そういえばお通夜のとき一緒にいたもんね。だけど起こしてくれたら一緒に行ったのに。」

直紀のフォローのおかげでなんとかこの場はごまかせたようだ。綾希は気付かれないようにホツと息を吐いた。

「それで、桜ちゃんは？もう寝ちゃってるかな。」

「それが、いなくなっちゃったんだ。」

梓は「え！？」驚いた様子を見せた。

「だから今、探してるんだけど、」

「なら、早く探さなきゃ！」

梓は直紀の言葉を遮って言った。直紀は少し気圧されてしまったようだ。

「とりあえず手分けして探そう。私とあやはそっちの方に行くから北上君は…」

綾希は梓のテキパキしたところやリーダーシップに感心していたが、すぐに感心している場合ではなくなった。この状況で梓と二人で組むのはできれば避けたい。残り時間も少ない中、これ以上の時間のロスは文字通り命取りだ。

「私は一人で行くよ。だから梓は北上君と二人で行って。」

父親を君付けで呼ぶのはなんだか変な感じがした。よく考えてみれば母親にいたっては呼び捨てになってしまっているが。

「なんで。」

梓と直紀の声が重なった。二人は顔を見合わせる。直紀の方は顔を再び赤くしてその顔を反らした。梓は気にしていない様子で続ける。

「あやはここの辺のこと知らないと思うし危険だよ。」

直紀もそうだよ、と何度も頷く。

「だからこそだよ。」

綾希は話しながら説教をされている気分になっていた。

「この辺りのことを知ってる二人の方が桜ちゃんを見つける可能性が高いじゃん。もし桜ちゃんに何かあったとき二人いた方が絶対いいよ。」

今日一番の言い訳だ、会心の出来だ、と綾希は心の中でガッツポーズをしていた。

「そう言われてみたら、そうかなあ…」

梓は納得しかけていた。だが直紀はまだ折れない。

「それなら三人で行こうよ。」

直紀は予想外に手強かった。もしかしたら好きな人と二人きりになるのが照れ臭いのかも知れない。しかしここで負けるわけにはいかなかった。

「三人もいらぬよ。梓の言った通り、早く探さなきや。さあ行くう。」

綾希は反論される前に強引にことを進めた。直紀は明らかに不服そうだが梓に呼ばれ少し戸惑いながら着いて行った。二人が行くのを見届けてから綾希も反対の方向へ足を進めた。

暗闇と水の音

「本当に暗いな……」

現代の様にあちこちに明かりがあるわけではなく道は暗かった。田舎ということもあってか、コンビニもない。真っ暗な夜道に慣れていない綾希は途中何度か転びそうになった。綾希はひどく不便だと思いつながらキョロキョロしながら歩いた。

特にあてもなく歩いていると水が流れる音がした。綾希はその音が聞こえてくる方へ歩いて行った。

「川……？」

行き着いた先は川だった。電気が無い為に川面も暗く水の流れる音だけがやけにはっきりと聞こえる。その様子が昔見たサスペンスドラマのワンシーンの様で綾希は身震いした。

さらに歩いていくと橋が見つかった。特に変わった所は見つからない、小さな橋だ。綾希は橋の手摺りに手を掛けて川面を覗き込んでみた。

「あれ？」

すると暗い水際の辺りに何か動くものが見えた。目を凝らしてよく見るとそれは人のようだった。それも、小さな。まさか……！！……綾希は急いで土手の方へ走りだし、橋から見えた物を探した。川はそこまで深くはなさそうだが、小さな子供にとっては溺れる危険性は十分にある。しかし暗い上に焦っている綾希はなかなかそれを見つげられない。綾希は思い切ってその名前を大声で呼んだ。

「桜ちゃん……！！」

すると近くでガサリと葉の音がした。

「桜ちゃん！？」

綾希はその慌ててその方向へ進んで行った。長く伸びた草が邪魔でなかなか思うように進めない。

「…………お姉ちゃん？」

聞き覚えのある声でした。やっぱりそうだ、と綾希は思いながら草を掻き分ける。数歩ほど歩くと少し草の量が少なくなったように感じた。そのことにより進みやすくなった綾希は大きめの歩幅をとって歩き出した。二歩目あたりで急に足場がなくなった感覚になった。

「あれ？」

そう思った瞬間にはもう遅くバランスを崩した綾希は勢いよく川へと落ちていった。バシャン、と大きな水音がした。

川岸

川に落ちた、そう自覚するのには少し時間がかかった。足から順にだんだんと冷たさが伝わって来る。体も重みを含んでいく。不意に死神の顔を思い出した。今はそんなこと考えてる場合じゃない。綾希は必死に何か掴まる物を探した、が。

「あれ……?」

あれほど焦ったにも関わらず、水位は余裕で足が着くくらいのものであった。少し前の自分の行動を思い出し、綾希は少し恥ずかしい気持ちになった。しかし足が着くと言っても、水位は決して低くない。綾希の身長は平均的なものだがそれでも胸部の少し下辺りまでは水に浸かってしまっている。まだ小さい桜が落ちてしまっていたらきつと最悪の事態に陥っていただろう。そこで綾希は最初の目的を思い出した。

「桜ちゃん!？」

衣服が水を吸ったせいですっかり重くなった体をなんとか動かし川岸の方に歩いていく。濡れた髪が顔に張り付いて気持ちが悪い。なんとか川岸に着き、岸に上がるうとしたとき少し前に聞いた声が聞こえてきた。

「お姉ちゃん?」

暗闇の中で桜が綾希を不思議そうに見つめている。綾希はというと、せっかく上がるうとしたのにバランスを崩し再び川へと音を立てて落ちた。

「お姉ちゃん?」

ずっと見ていた桜もこれには驚いたようで、水面ぎりぎりまで近寄って様子を伺おうとした。

「こつちに來たらだめ!」

近寄って来て落ちてもされたらたまらないと綾希は桜にこれ以上来ないよう注意した。それを聞いた桜は泣くでもなく動揺するでもな

くあつさりともとの場所に戻り体育座りを始めた。綾希はそれを見届けた後、ゆつくりと岸に上がった。プールから上がった後の様な寒さが襲って来る。プールならばこの後、タオルで水分を拭き取り着替えることが出来たのだが、実際は真夜中の川。しかも過去だ。もう少し落ち着いて探せばよかったと後悔しながら服を軽く絞る。一度、梓を探して着替えを借りようかなんて考えていると後ろから声がした。

「お姉ちゃん、どうしてこんなところにいるの？」

綾希は絶句しそうになった。同時に目の前にいるこの小さな子供をひっぱたいてやりたくなつた。あんたが急にいなくなるからだろうが！と怒鳴ってやるうかとも思ったが綾希はなんとか堪えた。相手は子供だ。それに泣かれでもしたらさらに面倒臭いことになる。綾希は慎重に言葉を選んで話し出す。

「桜ちゃんが急にいなくなつたから、みんな探してるんだよ。こんな時間に勝手に外に出たらだめでしょう？」

綾希はできる限り優しく言った。しかしそれを聞いた桜は俯いてしまった。言い方が自分が思っている以上にきつかつたのだらうかと綾希は焦る。

「…………ごめんなさい。」

少して桜は顔を上げて素直に謝ってきた。とりあえず、これで一件落着だとそれを見た綾希は安心した。

「じゃあ、おばさんも心配してるみたいだし帰ろっか。」

綾希は歩きだしたが、桜に手を掴まれた。手を繋ぎたいのだからかと思つたが、違うようで桜は綾希の手を掴んだまま一歩も動かない。

「…………桜ちゃん？帰ろっか？」

綾希はさつさと帰って服を替えたかつたのだが、桜はふるふると首を横に振つた。

「…………帰りたくない、とか？」

恐る恐る聞いてみると桜はこくりと頷いた。綾希はどこか思い詰めたよ様な表情をしている桜を見て頭を抱えた。

本当は、

希は頭を抱え、子供は面倒臭いなんて思っていた。自分が勝手に落ちたとは言え、ずぶ濡れになってまで桜を探した拳げ句に本人は帰ろうとはしない。もういつそのこと、置いて帰ろうとも思っただらいい。いくら夏場でも水に浸かったせいでひんやりと肌寒く、髪やら服が張り付いてきてさらに不快感を煽る。しかし、ここまで来て桜一人を置いて帰る訳にもいかない。

「どうして帰りたくないの？」

仕方なく綾希は聞いてみた。すると桜は少し俯いた。そして小声でぼそりと呟いた。

「宝物、なくしちゃったの。」

「宝物？」

意外な答えに綾希は面食らった。綾希はてつきり父を探しに行ったのだと思っていたからだ。桜は宝物といったきりまた下を向いてしまった。

「宝物って何？」

綾希は続きを聞こうとするが、桜が話し出す様子はない。話さないと云うよりさなんと云ったらいいのか考えているようだった。そんな説明が難しい宝物とは一体どんな物なのだろうかと綾希が考えているとようやく桜が口を開いた。

「パパから貰った時計。どっかに落としちゃったの。」

パパから、という言葉が綾希の胸に重々しく響いた。見ると、桜は泣き出してしまいそうな顔をしていた。

「桜は、パパとは、もう会えない、から、パパから貰ったものは、大事にしないと、いけないんだよ。」

泣かないように堪えていたのか、桜は一言一言を噛み締めるように話した。

「パパは、死んじゃったんだよね？帰って、来ないんだよね？」

まるでそれは自分に言い聞かせるような口調だった。綾希は通夜のときに桜に腹をたてたことを後悔した。桜は何もわかっていないんじゃないかった。きちんと父の死を理解していた。ただそのときにごう悲しんでいいのかわからなかったただけだったのだ。綾希は桜に何も言えなかった。ただ桜の隣に三角座りをして黙っていた。しかしそこで一つの疑問が綾希の頭に浮かんだ。

「ねえ、桜…ちゃん。どうしてこんなところまで時計を探しに来たの？」

ここは木々が茂っていて川もあり、少々危険な場所だ。そんな所にこんな小さな子が来て、時計を落としていくケースは考えにくい。桜は叱られたときのように下を向いたまま話した。

「昔、パパが釣りに連れて行ってくれたの。パパ、嫌なことがあったらここに来るって言ってた。だから、桜も…」

嫌なことか、と綾希は思った。人が死んだときにやることではないような気がしたが、相手はまだ幼い子供。未だにうなだれるように下を向く桜を綾希は責めるに責められなかった。そしてそんな桜を見て少し胸が痛んだ。相手が子供だったからなのか、ほかに家族がいなかったからなのか理由はわからない。普段、手のこんだドラマだろうがドキュメンタリーだろうが全く共感しない綾希にとっては不可解だった。しかしこうなってしまった以上どうしようもない。

綾希は心底嫌そうにため息をついた。

「桜ちゃん、その時計はどんなの？」

綾希が聞いてみると桜はきよとんとした目でこちらを見てきた。綾希は依然として張り付いてくる服を気にしながら立ち上がった。そして桜を見て言った。

「一緒に時計、探そうか。」

啞然

「一緒に時計、探そうか。」

そう綾希が言うと、桜は驚いたように顔を上げた。不本意ではある。だがそうでもしない限り、桜はおとなしく帰ってはくれないだろう。それにあんな悲しげな表情を見せられたらさすがの綾希でも無下にはできない。こうするしかなさそうだ。

「……本当？」

桜が呟いたが綾希は聞き取ることができなかった。

「え、何？」

「本当に一緒に探してくれる？」

桜はまっすぐに綾希を見つめてきた。

「うん。」

綾希は頷きながらそう言った。すると桜が小指を差し出してきた。綾希は首を傾げてその小指を見てみた。

「一緒に探すって、お約束。」

ああなるほど、と綾希は納得し桜と同じように小指を差し出す。反射的に小さい頃の自分を思い出した。こんなかわいらしいことをする子供ではなかったが。

「指切りげんまん、」

桜が元気良く歌いだす。綾希はというと、見つけ出さないと針をのまさされるなあなんてぼんやりと考えていた。

「……指切った！」

相変わらず元気な声とともに勢いよく指が離れた。桜はそのあとすぐに立ち上がり、上機嫌で周りの草むらをかさがさと探り出した。綾希もそれに倣った。しかし不快感と戦いながら草を掻き分けているうちにある疑問が沸いて来た。

「桜ちゃん、時計こんなところにあるの？」

冷静に考えてみると小さな子がこんな場所で落とし物をするとは考

えにくい。というよりも、こんな所に来ることすら滅多に無いだろう。だとしたら、これは時間の無駄だ。しかし桜は手を止めずに考える素振りをしだす。そしてこちらには目もくれないまま一言だけ言葉を発した。

「一回、来たことある」

桜は草を分ける手を完全に止めた。会話が成り立っていない上にここは一度しか来たことのない場所だった。きっとここに時計は無い。疑いが確信に変わる瞬間だった。

「ここに来たのはいつぐらい？」

とりあえず、綾希は聞いてみた。

「……さつき。」

「え？」

「さつき、ここ通った。」

背後からはまだがさがさと音が聞こえてくる。綾希は思考を止めてしまいたい気持ちでいっぱいになった。

「お姉ちゃん、止まってないで探してよ。」

桜の不満げな声が綾希の脳内にこだまするように響いていた。

上からの声

暗い草と木だらけの空間にガサガサという音だけが響く。しかしその音を出している二人の様子は対照的だ。桜は意気揚々と草を掻き分ける一方で綾希はけだるそうに周りを漁っている。

「本当に見つかるわけ…」

綾希がぼそりと呟いたのを桜は聞き逃さなかった。

「絶対にここにある！」

一体何の根拠があるんだと思ったが黙っておいた。あると信じて探す桜に対し綾希は諦め態勢に入っている。さきほど「一緒に探そう」と口走った自分が憎い。こんな面倒なことになるなんて予想外だった。こんな過去に来たのは運命を帰るため。果たしてこんなことで運命が変わるのだろうか。綾希の気分が服と同じようにだんだんと重さを含み沈んでいく。だからといって今更何か他にできることも思い浮かばない。もう捜すしかないのだ。あるかもわからない宝物を。十分程たった。完全にやる気を無くしていた綾希は桜が張り切って草を掻き分けている音がしなくなったことに気付いた。

「桜ちゃん？」

周りを見渡すと桜の姿がない。綾希の背中が一気に冷えていく。綾希はすぐさま立ち上がり、桜を探した。草むらなんか見ていないで桜を見ていればよかったと後悔の念が過ぎる。なぜこんなにもあの少女に肩入れするのかと自分でも不思議に思いながら小走りで林の中を探す。

「桜ちゃん!!」

大声で叫んでみるが返事はなく、声は暗闇の中へと吸い込まれていく。綾希はこんな短時間のうちに彼女はどこへ行ったのか必死に頭を巡らせた。濡れた服や土のせいで全身はもうドロドロだ。なんで自分ばかりこんな目に、と綾希は心の中で悪態をつく。

その時、ガサリという音が綾希の耳に入ってきた。慌てて周りを見

てみるが桜はいない。しかしまだ音は鳴り止まない。確実に近くで音が鳴っているはずだ。

「あつ……。」

綾希は何かに気が付いたように小さく声を漏らし上を見上げた。音は上からのものだった。よく目を凝らしてみると桜が木に登っている。綾希は桜ちゃん、と大声を出しかけたところでハツと口をつぐんだ。ここで驚かれて落ちられでもされたら困る。よく見ると桜は木の上で何かをじっと見ていてそれに全ての意識が持っていていかれているようだった。だがまずは彼女の安全確保が先だ。すぐに降りてもらわなくてはならない。綾希はできるだけ驚かしたり刺激しないように優しく桜に声をかけた。

「桜ちゃん！」

しかし桜は気づかない。よたよたと枝に掴まりながら動く様はなんとも危なっかしい。

「桜ちゃん!!」

さきほどより少し声を大きめにして呼んでみる。

「お姉ちゃん。」

やっと桜が気付いた。桜はにっこりと笑って綾希に手を振った。何も考えずに片手を枝から離す桜に綾希はヒヤツとした。

「時計、見つけたよ。」

そう言つて枝の先を指差す。綾希も目をやってみるとなにかキラリと光るものが見えた。下からでは時計とまではわからないが桜が嬉しそうにしているのだからそうなのだろう。やっと宝探しが終わると綾希が安堵したのもつかの間、桜はその枝の先に向かって進み出した。綾希は慌てて止める。

「何してるの。一回降りてきなさい。」

気をつけていたつもりだったがついきつい口調で話してしまった。

しかし桜は気にしていないようだった。

「大丈夫だよ。桜、木登り得意だもん。」

桜はどんどん進んでいく。得意とはいったがその木は相当な高さが

あり枝はさきほどから揺れ続けている。

「頼むから降りてきて……!!」

綾希が懇願するように言う。その時だった。

「桜ちゃん!!」

ばきり、という枝が折れ葉が揺れる音が辺り一面に響き渡った。

瞬き

「桜ちゃん!!」

細い木は重力に従って曲がり次の瞬間にあっさり折れた。重力は桜にも同様に働き地面に引つ張ろうとする。このままでは怪我をする。綾希は無我夢中で桜が落ちてくる場所まで走った。先ほどまで気になって仕方がなかった濡れた服も今では重みすら感じられない。とにかく走った。苦しいかそうでないかもよくわからない。あと数十センチのところ綾希は桜の身体まで必死に手を伸ばした。滑り込み、という表現が一番近いような状況だった。何かがぶつかるような音がして、あたりに砂埃がたった。一瞬辺りは静まり返る。少しして綾希がのそりと起き上がる。

「いつ…た…」

綾希は顔をしかめて手に着いた泥を払う。少し擦り切れて血も滲んでいる。服は更に汚れた。

「ちよつと、大丈夫なの…?」

綾希は腕の中で包む様に抱き抱えていたものを覗き込む。綾希が必死になったかいがあつて間一髪のところ地面との直接衝突は避けられたが、桜は黙っている。もしかしてどこか打ったのだろうか、と綾希は顔を青くする。

「桜ちゃん?」

もう一度話し掛けてみる。すると黙ったままではあるが、綾希の腕から抜け出し、綾希の前に立った。そして桜の顔が少しずつ楽しそうなものに変わって行く。頭を打ったかと危惧する綾希を余所に桜は口を開いた。

「お姉ちゃん、すつごいねーっ!」

「……え?」

綾希は口をぽかんと開けた。

「スーパーヒーローみたいだった!」

要するに先ほどの滑り込みが悪を倒すヒーローのアクションに見えたということなのだろう。びゅーん、などとスーパーマンが何かの真似をする桜を見て綾希はいつそのこと放っておけばよかったと自らの行動を悔やんだ。擦り傷程度だが自分は怪我をしてまで助けたのに当の本人はアニメでも見ているかのように能天気喜んでいるのだ。腹がたたないわけがない。もう一人で帰ってしまおうかと思っ
ているときに桜は何か思い出したように綾希の手を握って来た。

「……何？」

綾希はぶっきらぼうに言う。桜はそれににこりと笑った。

「お姉ちゃん、助けてくれてありがとう。」

子供というのは狡い生き物だ。そんな風に言われたらこれ以上責められない。

「……もう帰るよ。」

綾希はため息を吐いてもきた道を引き返す。桜はうんつと嬉しそうに小走りできてきた。とりあえずこれで一件落着だ。綾希はこれは運命を変えたと思っていいんだろうか、と考えていた。桜が落ちそうなところを助けた。自分が助けなければ桜は死んでいた、とまではいくかわからいが確実に怪我はしていただろう。だが自分がもとの時代に戻る気配は全くない。そういえば、元に戻る方法を聞いてすらいない。これではいけないのではないか。

「あの適当死神……。」

綾希は桜に聞こえないように呟く。夜が明けるまで、あと数時間。

瞬き（後書き）

更新しようと思っていたのにいつのまにか二週間以上も間を開けて
しまっていました（汗）

この「白い月」、もうちょっと続くのですがだんだんとクライマッ
クスに近付いていっている状態です。

どうかよろしければ、もう少しの間お付き合いお願いしますm（
）m

佐久間

外国製の形見

少し歩くとこの辺りではほとんどお目にかかれぬ街頭がぽつんと見えた。

「桜ちゃん、あっちに行こうか。」

桜に声をかけると、手の中の時計を大事そうに眺めながら歩いているのが目に入った。あんなに高い木に登ってまで取りに行ったぐらいなだから当然だろうがそのせいで足元が不確かで危なっかしい。そういえば一体どんな時計なのだろうか。

「ねえ、桜ちゃん。ちょっとその時計見せてくれない？」

理由は単純に気になっただけだ。この数時間の間でもそれなりの信頼関係は築けたようで桜は快く見せてくれた。綾希の手に小さな時計が置かれる。時計は銀の懐中時計だった。

「アンティークかな？凝った装飾……」

綾希はしばらく時計を眺めたあと、あることに気づき時計をもう一度見た。

「これ……」

桜から渡された時計は既に見たことのあるものだった。見たのは、数時間前。そう、死神が時間を戻すときに使ったものとそっくり同じものだった。一体どういうことなのか。どこにでもあるようなデザインには見えない。綾希は注意深く時計の蓋を開けた。文字盤にはきちんとローマ数字が打たれていて、死神の持っていた時計と唯一異なっている部分だった。綾希は少し針を動かしてみたが死神のときのように時が戻る様子もない。

「お姉ちゃん、早くー」

綾希が時計を食い入るように見つめていると、数メートル先にいる桜から声がかかった。どうやら足が止まってしまっていたようだ。

綾希は時計を右手に握って桜のところまで小走りで行った。

「それ、桜の宝物なの。」

綾希の手に握りしめられている時計に気がついた桜が自慢げに言う。

「桜ちゃん、コレってどこで手に入れたの？」

とりあえず聞いてみる。

「パパからもらったんだよ。」

「そうじゃなくて…。パパがどこで買ったのか、とかわからない？」

聞いてみたが特に答えに期待をしてはいない。わからないだろう。

桜もうーん、と唸っている。

「変なこと聞いてゴメンね。もういいよ。」

綾希は桜に声をかけて歩き出す。しかし桜がついて来る気配がない。振り返ると桜は立ち止まって視線をさ迷わせていた。綾希は少し面倒臭そうにため息をついた後、桜のもとに駆け寄る。

「桜ちゃん……。」

行こう、と綾希が言おうとしたときに桜があつと何かを思い出したように声を出した。

「パパが外国の物って言うってた！」

「外国……？」

綾希はもう一度時計をじっと見つめる。

「お金払って作ってもらったんだって。だから世界に一つだけだ、って。」

なるほど、オーダーメイドか。確かに市販ではこんな上品な細工の時計ははなかなか手に入らないだろう。しかし一つひっかかるものがある。世界に一つだけ、というところだ。文字盤こそ違いものの、ほぼ同じ装飾のものを覚えてしまっている。

「どうしてだろう……。」

綾希は時計を裏返したり装飾をなぞってみたりしながら呟いた。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

桜が不思議そうに見上げてくる。

「なんでもないよ、ありがとう。」

綾希は桜に時計を返す。桜は嬉しそうにそれを受け取り走り出す。

「桜ちゃん？」

それを止めるように綾希が呼ぶ。

「ここの道知ってるよ。こっち。」

桜が少し遠目から早くと言って手を振る。そしてまた走り出す。

「まったく……。」

どうして子供というのは、と少しいらつきながら早歩きで後を追った。随分離れてしまい焦っていると桜が再び走って戻って来た。

「どうしたの？」

まさかまた時計を落としてもしたのではないだろうな。

「お姉ちゃん、大変だよ。早く来て！」

桜が綾希の手を引っ張る。綾希は状況もよくわからないまま半強制的に走る。こちらは疲れているというのに。一体何が危険だということなのか。

「ほら。」

走ったのは少しだった。綾希はだるい足を気にしながら桜の指差した方向を見た。

「……わあ。」

綾希はその方向を見て呆然とした。なぜ今日はこんなにも色々なことが起こるのか。先ほど通った橋が壊れていた。橋を見つめている桜と言葉を失った綾希。何事もなかったかのような川の流れる音だけが静かに聞こえていた。

少女は消えた

静かな川のほとり、二人の目の前には壊れてしまつて途中までしかない橋がただ存在していた。よくみると橋の材質は木で相当古いものようだ。川が増水した様子もなく寿命だったのだろう。

「うわぁ、橋ぼろぼろー。」

桜は壊れた橋から身を乗り出して川を見ている。

「桜ちゃん、危ないから降りて。」

もうあんな気分はごめんだと綾希は桜を注意した。それにしても橋が壊れたのをニュース以外で見るのは初めてだ。何も対処がされていないところを見ると、壊れてからまだあまり経っていないのだろう。綾希は周りを見回したがそれ以外の橋は見当たらない。さらに遠回りしなくてはならないのか、と綾希は顔をしかめながら桜に声をかけた。

「川、渡れないね。あっちの方まで橋を探しに行こうか。」

桜の方を向いた綾希は言葉を失った。

「綾希さん……。」

そこには桜はいなかった。

「さっきぶり、ですね。」

「どうして……。」

代わりに綾希を過去へ飛ばした張本人である死に神が立っていた。死に神はゆっくりと綾希に歩み寄つて来る。綾希は瞬間的に今は何時なのか確かめたくなった。自分は運命を変えることができたのだろうか。

「……もう時間なの？」

そう言われた死神は表情を変えずに返事をする。

「いえ…違ふと思います。」

「思います？なに、その適当な言い方。」

そう言つて死神は言葉を探しながらぼつぼつと喋りだす。

「私は綾希さんに時間を告げに来たものではありません。私が来なくても何かしらの結果が出ますから。私自身も何故ここへ飛ばされたのか、わからないんです。」

「そんな……。」
嘘でしょう、という前に死神は続けた。

「しかし一つだけ、わかったことがあるんです。」

「え……?」

死神はポケットをゴソゴソと漁り、「これです」と取り出した物を見せる。

「それは……!!」

綾希は目を見開く。死神が見せた物は時計だった。綾希が過去へいくときに死神が使った時計、そして桜が父から貰ったといつて自慢げに見せた懐中時計だ。それをみて綾希の脳内で一つの結論が出た。この時代で起きたことが推理小説の伏線のように頭の中を巡る。綾希は特別動がいいという人間ではない。本人も自覚している。しかし、これは恐らく間違っではない。根拠はないがそんな予感があった。綾希はその結論を抱きながら、まるで何かの結果発表を聞くような気持ちで死神の言葉を待った。死神がゆっくりと口を開く。BGMのように規則的な川の流れる音がしていた。

「私の、」

綾希は緊張した面持ちで死神の顔を見ている。

「私の名前は日野桜。父親が死んだ夜に橋から落ち、この川で死にました。」

死神は息継ぎをすることなく言い放った。綾希は頭が追いつかず、頭の中で必死にその言葉を理解しようとした。死神は暗闇にぼんやりと浮かぶ月をただ眺めている。

少女は消えた（後書き）

けっこうな間、更新から遠ざかってました……

でもクリスマスまでには絶対、更新しよう！！と思っていたのになんとか間に合ってよかったです

白い月は終盤に差し掛かってるんですが年内に終わるか、年初めか……といった具合です

とにかく頑張ります！

佐久間でした。

メリークリスマス！！

死神と少女

「この川で死にました。」

死神は間違いなくそう言った。綾希は最初、言っている意味が何一つわからなかった。返事をするのにも時間を要した。

「名前が、日野桜？」

やっと出した声は完全に震えてしまっている。

「何言ってるのか全くわからないよ。からかっただけだよ。どっかで私のこと見てたんでしょう。だから桜ちゃんの名前を知ってたんだ。」

そう言うのと死神は予想外だというふうに驚いた顔をした。

「いいえ。先ほど言った通り、私は綾希さんの家で待っていました。」

綾希は死神にもわかるように大きくため息をついた。

「あんたが桜ちゃん？桜ちゃんは小さい子供だよ。そんなわけないじゃん。」

死神が桜だというのは綾希の中で出た結論と一致するものだった。しかしやはり面と向かって言われるとどうも信じることができない。

「信じて頂けないんですね。」

「そりゃあそうだよ。」

「では今私が嘘をついたとして、得をするのは一体誰ですか？」

綾希は返答に困る。確かにそうだ。それに死神の言ったことが嘘ならば、この場に桜がないことの説明がつかない。

「私は死神ですがどうして死神になったのかはわかりません。以前に初めて目が覚めたのは月の綺麗な晩だと言いましたよね。私にはそのときより前の記憶はありませんでした。」

綾希は死神の言葉が過去形であることが気になった。

「しかし先ほど、突然甦ってきたんです。小さい頃、父に遊んで貰

ったこと、懐中時計をくれたこと、そしてその大好きな父が死んでしまったこと。」

綾希はただ死神の話しを聞いている。あまり表情の変化のない死神の表情がこのときはすこし泣きそうになっているような気がした。死神はそこからぼつりと付け足した。

「そして気が付いたらここにいました。」

綾希は俯いた。返す言葉が見つからなかったからだ。

「綾希さんはもしかしてこの時代で日野桜に会ったんですか……？」

「うん。さつきまで一緒にいた。」

「そうですね……。」

死神は橋の近くから川を覗き込む。その行動が先ほどまでずっと見ていた幼い桜の姿と重なる。

「父の葬儀の日、私は形見である懐中時計を探しに家をとびだしました。普通は近くの道を探したりするものなのでしようが私は山の方へ向かいました。勘とでも言うのでしょうか、そこにある気がしたんです。その予想通り時計は山の何処かの木の上にありました。おそらくカラスが持って行ったんでしょう。時計を見つけた私は早足で家に向かいました。自分からとびだしたとは言え、暗い夜道は小さい私にとっては怖いものでしたから。そして、この橋を渡っている途中で橋が崩れ私は川に落ち、死んだのです。」

綾希は珍しくよく話す死神に驚きながらこれまで一緒に過ごした桜の行動を思い返していた。しかしそこで、一つ疑問が浮かぶ。「橋を渡っている途中で橋が崩れた」という部分に関してだ。綾希は「ねえ、」と死神に声をかける。

「橋は私達が来たときにはもうこんな状態だったよ。それに桜ちゃんも橋から落ちたりなんてしてない。」

死神はそれを聞くと少し考え込んだ。そして結論が出たのか、綾希の顔を見た。と言ってもその表情はあまり自信のなさそうなものだった。

「もしかしたら……。」

死神は一度言いかけて口をつぐむ。発言に躊躇しているのだろうか。
「早く言つてよ。」

死神と初めて会ってまだ一日もたっていないが死神の態度に苛立つ
ということがなんだか久しぶりのことのように感じた。死神はすみ
ません、と謝り話を再開した。

「綾希さん、あなたが変えたのは私の運命なのかもしれません。」
風が強く吹いて周りの木々を大きく揺らした。

運命

「私があんたの運命を……？」

「はい。あくまでも私の推測ですが。」

綾希はふむ、と考え込む。一体この死神の何をどう変えたというのだろうか。見た所何一つ変わっていない。

「もう少し詳しく聞かせてよ。」

考えるのが面倒になった綾希は死神に解答を求めようとする。

「私……日野桜は死ぬはずの人間でした。これは運命です。しかし、綾希さんと関わったことで日野桜の行動に遅れが生じた。結果、日野桜が渡る前に橋は崩れた。」

「……成る程。」

これは綾希にも何となく理解できた。

「つまり、あたしが桜ちゃんを救った。で、その桜ちゃんはある。そういうこと？」

思い切りかい摘まんで言うと死神は大きく頷いた。綾希は心の中で唸り声をあげた。理論的にはわかるがどうにも信じ難い。死神が日野桜と名乗ったことだってまだ完全に信じ切れた訳ではない。しかしあの時計を持っているあたり信じなくてはいけないようだ。

「てかさ、」

綾希は腕を組んで死神に問い掛ける。

「運命変えたんだつたら私、帰れるんじゃないの？なんで逆にあんたがこっちに来てるのさ？」

「それは……。」

死神が口ごもる。綾希は何か勝ったような気持ちになった。しかし自分で言っただけで不安になってきた。現代に帰ることが出来ないのは結局何も変わっていないということではないだろうか。

「あ……。」

そのとき死神が小さな声を漏らす。理由はすぐにわかった。真つ暗

だったあたりがだんだんと夕日のような色に染まっていく。

「夜明けだ……。」

綾希はただそれに魅入っている。だがすぐに我に帰り焦りだす。

「夜が明けたってことは、期限時刻が迫って……死神!？」

綾希は言葉を中断し死神を凝視した。気のせいではない。死神が少しずつ薄く、透けていつているようなのだ。ひどく慌てる綾希とは対照的に死神は落ち着いていた。

「おそらく、運命が変わったことによる結果が出たのでしょう。薄くなつていくことに比例して声まで聞き取りにくくなっているような気がする。」

「結果つて……あんたが死ぬってこと!？」

「さあ、わかりません。そうかもしれないし、死神でなくなるのかも、はたまた現代に戻るだけということも考えられますね。」

冷静に考えている場合なのだろうか。死への恐怖を知っている綾希は自分のことのように動揺した。死神はそんな綾希に淡々と話す。

「私は死というものはよく知りません。川で死んだということは覚えていますが、死ぬ直前やその後のことはわかりませんでしたからだからたとえ死ぬという結果でも、私は怖くないし全然構わないのですよ。」

「でも……!!」

綾希が更に何かを言おうとしたとき、死神は何かを思い出したように小さく声を漏らした。

「そういえば、私が死んだ日は満月の日でした。」

今思い出しましたが、とつけ加える。それがどうしたのかという顔をする綾希に死神は微笑む。

「何ということはないんですよ。ただ、満月の夜に死んだ人間が死神になるのかもしれないな、と。」

こんなときに何を呑気な、と綾希は呆れた。

「満月の度に死神になってたら世界は死神だらけになるんじゃないの?」

「そう言われたらそうですね……。もしかしたらほかにも条件があつて、その一つがそれなのかもしれないじゃないですか。」
綾希はふうん、と気のない返事をする。死神はまた一段と薄くなつた。

「あ、見て下さい。」

薄くなつている張本人の死神は呑気に空を指差した。綾希はその方向に顔を向ける。

「白い月。」

そこには白く薄い月が見えた。もうまわりはすっかり明るい。

「私、月を見るのが好きなんですがその中でもあの月が特に好きなんです。なんだか、神秘的でしょう？」

「曲がりなりにも神であるあなたが神秘的とか言っていていいわけ？」

「いいんです。神といつても死神ですし。奇跡をおこせたりするわけではないんですから。」

死神につられてだんだんと綾希も冷静でいられるようになってきた。しかし死神は更に薄くなる。

「そろそろお別れかもしれません。」

死神がぽつりと呟く。

「直に綾希さんにも何らかの結果が出るでしょう。私とあなたの死という絆はどのように形を変えるのか……。そして私の運命はどう変わったのか。今まで死神として生きてきて楽しいこと、逆に悲しいことも得にありませんでした。でも、」

そう言いかけて死神は綾希の顔をじつと見て、笑いかける。初めて見たような、優しい笑顔だった。

「一つ楽しみが出来ました。」

そう言つて死神は消えてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674v/>

白い月

2011年12月29日12時47分発行